Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-04

アジア人留学生・就学生の生活と文化変容(4)

浅野, 慎一

(Citation)
神戸大学発達科学部研究紀要,4(2):313-342

(Issue Date)
1997-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81000260

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000260

神戸大学発達科学部研究紀要
第4巻第2号 1997

アジア人留学生・就学生の生活と文化変容（4）

浅野　慎一

-A Sociological Study on Asian Students in Japan:Their Life and Acculturation(part 4)-

Shin-ichi　Asano

第5章　留学生・就学生の社会認識の変容

第3節　「経済大国＝日本」の経済的諸問題

ところで留学生・就学生は「経済大国＝日本」の経済構造にも様々な矛盾・問題を見い出している。

第1項　経済侵略・援助精神の欠如

まず、「経済大国＝日本」は、彼らの母国に対して援助精神を欠き、むしろ経済侵略的ですらある。この問題は、中国人の国費留学生・理系私費留学生、及び、韓国人・インドネシア人留学生等、総じて理工系を専攻する者の一部が、来日前から感じていた[1]。そして多くの場合、こうした認識は、来日後も改善されず、むしろより深まっている[2]。中には、経済大国・経済侵略の延長上で、日本の新たな軍事大国化を危惧する意見もある。

＊「来日前から、日本は中国に対して保守的だと思っていた。高レベルの技術を中国に渡さない。5年位遅れた技術でもいいから、中国に輸出してほしいと思っていた。特にエレクトロニクスで、もっと開放してほしい。噂では、日本のビジネスは非常に細かい事まで譲らない。中国の事を考えず、自分の金儲けだけしか考えない。国や企業がけちという事かな。日本の商人はずるすぎる。79年、中国に古い機械を売って問題になった。今、中国は大きな市場で、日本の電機製品でいっぱいだ。長期的には、日本にも利益になるのだから、借款とかばかりではなくて、もっと協力してほしい。中国が日本を重視しているほど、日本は中国を重視していない。日本は、欧米に近づこうとして、そちらの事ばかり考え過ぎている。外交がアメリカ寄りなので仕方ないが。来日後、日本が、これから軍事大国になるかなぁと思う。中国も昔のように弱くないが、自衛隊もあるし、日本人はどうも好戦的な気がする。あと30年すぎたら日本人はどうなっているのか。20年前なら、日本人は誰も戦争したくなかっただろう。でも今は経済大国になり、海外にいろんな利害関係も増え、自信もついているから、戦争や軍事力に対する嫌悪感が薄れてきているようだ。実際、中国人の立場から言うと、貧しいアジアの中で日本は一番豊かなのだから、日本の軍事力はとても気になる。これからも日本が他の国を侵略できる軍事力をもたない限り、非常にいい」（中国人日本政府国費）

＊神戸大学発達科学部社会環境論講座

「来日前から、日本は援助精神が足りないと思っていた。円借款が多すぎる。後で返せなくなるかも知れない。日本の資本家も、結局、儲けるためでしょ。古い借款を返すために新しい借款をする。悪循環だ。それに、日本の電機製品・テレビ・冷蔵庫・車・洗濯機が入ってきすぎる。日本の物ばかり溢れて、自分の国の工業を潰すんじゃないか。もっと貿易のバランスを考えてほしい。また日本は、ココムとかあって、コンピュータの事など教えてくれない。日本人は、金になれば何でもして、あまり自分の国に自尊心をもっていない気がしていた。妥協してもメンツをつぶしても、金になればいいという感じ。日本人は金持ちだけど、けち。日本人の観光客の買い物を見ても、皆、お金はたくさんもっているのに、電卓をたたいてパチパチ計算ばかり。来日後も、日本の経済侵略・利己主義についての見方は変わらない。もっと強くなった。実際、日本にきてみると、日本人は自分の国の環境をとても大切にしている。どこに行っても緑がある。木を切らない。その代わり、他の国の木を切り倒している。日本のことだけ考え、世界のことを考えない。日本の公害は、皆、気をつけているからよくなっている。でも皆、同じ世界に住んでいるのだから、世界全部のことに注意しなければ」（中国政府国費）

「来日前、日本の経済発展の原因は、客観的には、戦争の復興費や戦後の経済侵略だと思っていた。日本人側からみると、技術の進歩や勤勉ということになるだろうが、それは主観的だと思っていた。日本の会社は、いろんな国に建物とか土地をたくさん持っている。たくさんの日本のビジネスマンが外国にいる。そういう日本人は、あまり信用できないような気がしていた。どうも嘘つきの感じがする。中国はいい技術を取り入れたいが、日本は古い技術を輸出したりする。そういう事がいっぱいある。同じ先進国でも、ドイツやアメリカは信じられる。私の専門の関係でも、日本は技術は高い。それでも一緒に研究する相手としてはドイツの方が信頼できると感じていた。来日後、この点ではあまり考えは変わらない。日本人はやはり自分達の豊かな経済が外国からきているとは考えていない」（中国人理系大学院私費）

「来日前、インドネシアにいる日本人は、なぜいろいろ教えてくれないのかと不満だった。日本は権利委譲・技術移転しない。日本の会社は研究所をもってこなくて閉鎖的。インドネシアにいる日本人のエキスパートは集団意識が強く、オープンじゃない。日本の技術は何でもトップ・シークレット。ドイツ人はデータを教えてくれる。アメリカと比べても、日本の利益計画は短期的。経済援助だけ、お金だけでは何にもならない。私の希望としては、技術を教えてもらって10年後に全部インドネシア人の手でできるようになりたい。インドネシアで三菱や東芝の人と会議をした。こちらが質問したが、答えが的外れでピッタリしていない。相手にしませんという感じ。アメリカ人の返事はよくわかった。日本人は秘密にしていると思った。向こうで工場を作る時も、日本人はお金だけ出して、技術は教えてくれない。ヨーロッパは、お金を出して技術も教えてくれる。もっと企業のやり方とか技術とか教えてほしい。ＪＩＣＡで来る日本人も定年になった人ばかりで若い人が少ない。もっと若い人とオープンに交流したい。日本人は、日本という国しかみていないので、どこから自分の豊かな経済がくるのか、あまり考えていない。他国の森を切り開いたりして、危ないこともある」（インドネシア人大学院生）

なお、こうした「経済大国＝日本」の援助精神の欠如の一つの現れとして、中国人留学生・就学生は、留学生受入数の少なさ、受入体制の厳しさを指摘している。また文系大学院の中国人私費留学生が、来日後、日本社会に欧米偏重・アジア軽視を感じていることも、こうした援助精神の欠如と関連している。

＊「留学生、特に国費の増加を望む。もっとオープンにしてほしい。アジアの中で、今、日本の地位は優れている。その割に留学生の受入数が少なすぎる」（日本政府国費）

「柔軟に留学生を受け入れてほしい。特に中国人に厳しすぎる。日本は経済大国なのだから、途上国にもっと援助精神をもって留学生を多く受け入れてほしい」（専門学校生）

「これからも留学希望者はたくさんいると思うが、日本政府は断らないようにしてほしい。日本に１年いて、

勉強しない人は返して、そうでない人を残すようにしてほしい。本当に勉強したい人が、全く手続きの事で許可が下りない。何とかならないか。日本は、留学生の受け入れも、奨学金も少ない。経済大国なのだから、もっと柔軟に、援助精神をもって留学生を受け入れられないものか」（私立大学生）

第２項　資源・食糧の海外依存

日本経済が、資源や食糧を海外に依存した脆弱な基盤の上に成立していることに対する危惧もある。これは、中国人の理系大学院や専門学校の私費留学生の一部が、来日後、再認識している。

＊「日本は今は経済大国だが、自然は貧しい。そのことを考えると、将来は心配だ。世界の市場・原料に依存・制約されているから、もし世界の市場の条件が変わったら、日本もすぐ変わる。石油や食糧をこんなに外国に依存して、不安はないのか。日本は、これからが大変だ」（理系大学院生）

「日本は経済大国だが、外国に資源や石油を依存しているから、本当の大国にはなれない。例えば中東で戦争が起きたら、すぐに石油の価格が影響される。他の国の影響で自分の国がすぐ変わるし、他の国が石油でも食糧でも輸出を閉鎖すれば、すぐだめになる。今は経済大国でも、必ずいつかだめになる。日本は何か頼りなく、不安をもつ。以前は、日本はいいと考えていたが、日本の事をよく知ると、やっぱり完璧じゃない、いい面と悪い面がある。今、考えれば、当たり前の事なんだけど」（専門学校生）

第３項　貧富の差と生活水準の低さ

そして留学生・就学生が感じている日本経済の最大の問題は、豊かなはずの日本国内でも貧富の差が大きく、特に下層階級の生活水準が低いことである。ただしその認識の内実は、国籍・属性毎に差がある。

まず、中国人日本政府国費留学生の多くは、「貧富の差」を強く感じている。彼ら自身は、奨学金で比較的豊かな生活をしているため、「生活水準の低さ」についての具体的認識は希薄である。

＊「日本人は金持ちばかりと思っていたが、来日後、そうではないことがわかった。皆が同じレベルで豊かに生活しているわけじゃない。金持ちと貧乏人の差が大きい。新聞で、日本人の平均貯金が一千万円以上と書いてあったが、収入の高い一部の人がたくさん貯金しているだけだと思う。日本は、お金がある人には何でもできる社会だと思うが、お金がなかったら日本の社会はそれほど便利とはいえない」

中国政府国費留学生の多くは、日本人の「生活水準の低さ」を指摘している。彼らは、自ら厳しい経済生活を余儀なくされ、しかも大学内部に視野がより強く限定されているため、「貧富の差」よりむしろ、「生活水準の低さ」という形で日本の現実を認識しているのである。

＊「来日前は、日本人は豊かな生活をしていると思っていた。来日後、日本は経済大国だが、国民の生活はそんなに豊かではないと思った。物価も高いし、実際の生活水準はそれほど高くない。家賃も高く、日本では普通の人は40～50歳になってからやっと家が買える。中国では、皆、貯金して家が買えるのに。日本は国としてはたくさんお金をもっていて経済大国なのだから、国民の生活をもっと向上すべきだ」

そして中国人の私費留学生・就学生は、「貧富の差」と「生活水準の低さ」の双方を表裏一体で感じている。彼らは、アルバイト先やアパートで下層階級の日本人と日々接し、また自らをもそうした下層階級の一員と位置づけている。こうした認識は、中国人私費留学生・就学生全般に見られるが、とりわけ単純労働のアルバイトに従事している専門学校生や就学生に顕著である。

＊「来日後、日本には大金持ちもいるが、普通の人達の生活レベルはそんなに高くないと思った。中には、すごく貧乏な人もいる。すごく差がある。このレベルの差が問題。だから一般の人達の生活は豊じゃない。学生も大変だ。皆、バイトしている。しなければ生活できない。下の人達の生活は、一見、車とか電器とか目

につくところはいいが、楽ではない。貧乏な人達の生活はそんなに便利とはいえない。サウナのサービスのアルバイトをした時、日本の下層階級の人達の暮らしぶりがよくわかった。人々の生活は、いつだめになるか、いつ低い階層になるか、不安定だ。中国では、病気になっても生活の心配がない。日本では、病気になると仕事もなくなる。これはひどい」（理系大学院生）

「来日前は、日本人は皆、金持ちと思っていたが、来日後、けっこう大変な人もいるのがわかった。金持ちはすごく金持ち、貧乏な人はすごく貧乏。経済大国になぜ、こんな貧乏な人がいるのか、びっくりした。ある人は、私達よりもっと貧乏。文化的な生活をしていない。経済大国でも、貧しい人達の生活は改善されていない。こんなに物価が高く、生活しにくいとは思わなかった。普通の日本人の生活は大変で、あまり豊かという感じはない。日本人は、あまり遊ばず、旅行もせず、あくせく働いて、家を買って一生ローンを払う。人間の生き方が爽やかではない」（私立大学生）

「来日前は、日本は本当に豊かな国で、皆、働かなくても食べられるかなー、文化水準もいいかなーと思っていた。来日後、やっぱりどこに行っても同じくらい働かなければならないとわかった。貧富の差が大きいこともわかった。日本は、国は金持ちだけど、普通の国民は金持ちではない。家もないし、自分の出会った日本人は殆ど貧しい。会社に入っても、ただ生活費をもらうだけで、給料も高くない。仕事先でいろんな人と話すが、困っている人も多い。コンビニで一緒に働いた大学生に聞いたら、大卒でも初任給18万円、高卒なら14万円位しかもらえない。若ければバイトでも結構もらえるが、年をとってからの生活の保障がない。日本は全部近代的な高層ビルばかりかなーと思っていたら、実際のアパートを見て、これは中国より古くて狭い、本当にここに日本人が住んでいるかなーとびっくりしたよ。ある人は、毎日カップラーメンを食べている。下の人の生活は大変だ。どうみても人間が平等ではない。下の人達、普通の人達には、日本は全然自由じゃないよ。仕事しないと食えないから、自由な生活なんてできない。金がないと何もできないし、大多数の人は、毎日、アパートに住んで働くだけで、全然自由じゃない。来日前は経済大国と思ったが、現実をみて、人民がどう生活しているかを見て、考えが変わった」（専門学校生）

「日本が経済大国なのは本当です。でも貧乏な人もいっぱいいます。私が中国にいた時より生活水準が低い日本人がたくさんいて、下の人々はすごく貧乏です。特に自分の部屋をもっていない人や、子供のいないお年寄りはとても困っています。仕事柄、日本の下の人々と接する機会がたくさんあります。掃除婦をしていた時、一緒に働いたおばあさんは65歳で身寄りがありません。１カ月10万円の収入です。家賃に３万円、食費や生活費を払うと、貯金は１カ月5000円位しかできないそうです。生命保険にも、お金がなくて入れないそうです。私が『病気になったらどうするの』と聞くと、『わからない』と言っていました。別のおじいさんは、『知人に頼るしかない』と言っていました。その人の弟が８年前、入院しました。たくさんの人が一緒の一番安い病室でも、１カ月８万円かかるそうです。お金がない人にとって、日本は困った国です。将来のことが全然わからないからです。私の隣に住んでいるおばあさんも、１カ月12万円で生活しています。電話もありません。扇風機もなくて、夏はとても暑いです。テレビも古い白黒です。あまり食事も食べていないようで、すごく静かに寂しい生活をしています。そういう人を見ていると、これではいけないと思います。そういう人々と、仕事柄、また住居柄、よく話をします。別の知人は、子供が結婚しましたが、給料が低いので、一緒に住めないのです。その人は、年寄りなのに、３時から12時まで居酒屋で働いています。居酒屋は、毎日、宴会の連続で、すごく疲れる仕事です。すごく悲しいことです。食物屋さんで働けば、食費が助かるのですが、年をとった人は身体が不自由で、手が上まであがらないので、高い所に皿をおいたりできないので、身体を小さく動かす掃除の仕事しかできないのです。私は、日本の一番下層の人達と会っています。あるおじいちゃんは、退職した後、年金で15万円しかありません。その人は、掃除夫の仕事をしていて、家具とか何でも拾ってくるので、子供に嫌われて別居させられてしまいました。おじいちゃんは寂しくて、酔っ払って、駅でケガをして入院してしまいました。その後、どうなったかわかりません」（専門学校生）

「来日前は、日本人の生活は豊かだと思っていた。天国みたいな進んだ技術の国だと思っていた。来日後、

国は豊かだが、人民はそんなに豊かではないとわかった。金持ちの人もいるが、貧富の差が激しい。人民が平等に豊かではない。普通の人民の生活は、そんなによくない。アジア人とだいたい同じだ。貧乏な人もいっぱいいる。一生懸命働いても、自分の家ももてない。アルバイトの職場の日本人の話を聞くと、皆、そうだ。たくさんの老人が一生懸命働いている。これはちょっと胸が痛む」（大卒専門職出身就学生）

「中国にいる時は、日本は経済大国と思っていた。いい所だけ知っているから。今は、いい所も悪い所も知っている。例えば、金持ちの人と貧乏な人がいる。よく見ると、貧困な平民も多い。日本人は車をもっていても、駐車場にもお金がかかって大変だ。年よりの人には年金があるが、それだけでは生活も大変だ。子供の扶養がない人は心配している。たくさんの年寄りが、生活のためにつらい仕事をしている。これから若者が少なくなり、老人社会がくると、もっと大変になるだろう」（高卒労働者出身就学生）

なお一部の中国人私費留学生や就学生は、こうした日本の問題、特に下層の高齢者の現状を知る中で、逆に社会主義の長所を認識し、また現在の中国の改革開放の行方に不安をもつに至っている。

＊「日本にきて、日本の問題を知ることで、中国の将来にも不安を感じるようになった。今、中国も市場経済の中で、皆、貧乏になって、一生懸命お金のことだけ追求している。そうでないと、年をとってから生活できないから。日本と同じ問題が出てきている。社会主義を維持すべき。これは日本に来てから、強く思うようになった」（専門学校生）

「社会主義のいい所は、年をとってもお金をもらえること。若い頃、あくせくお金を稼がなくても、死ぬまでもらえる。日本の老人の実情をみて、そう感じた」（就学生）

さて、韓国人留学生では、来日後も、「日本は経済大国で、日本人は皆、豊かで文化的な生活をしている」と感じている者と、「日本人の生活水準は低い」と感じている者とが相半ばしている。後者は、経済的にゆとりのある国費留学生に多い。なお韓国人には、日本に「貧富の差」があると感じる者は少なく、むしろ韓国より「貧富の差」は少ないと感じている。

＊「日本は、国は経済大国だが、個人は何が豊かかわからない。豊かと言われるほど生活環境がいいとは思えない。土地が高く、家も狭い。大学卒の収入もあまりよくない。基本的な生活の必要品は安定しているが、それ以上のゆとりは感じられない。来日前は、統計だけで見て、国民所得も世界１～２位だから、韓国の何十倍もの生活をしていると思っていた。でも来日後、物をたくさんもっているという意味では、日本はそれほど豊かではないと感じた。日本は国がお金をもっている。ある日本人は、自分達はそれほど豊かじゃない、大企業が豊かなんだと言った。でも、分配には、どこの国でも問題がある。韓国に比べると、日本では貧富の差・階級格差は少ない。外から見ていると、階級差がわからない。だから日本に対しては、貧富の差より、全体として生活水準が思ったより高くないと感じる」（日本政府国費）

マレーシア人就学生の多くは、日本は、母国に比べ、「貧富の差」は少ないが、経済大国であるわりには国民の「生活水準が低い」と感じている。

＊「日本の生活費・物価は高い。だから日本にはお金のたくさんある人は少ない。一般の人は働いてもらうお金を殆ど生活に使っている。東京の人は、お金をたくさん儲けるが、必要品を買って使ってしまう。日本はお金持ちの国と思っていたが、人民の生活はあまりお金がない。国としては経済大国だが、国民の生活は全体にそれほど豊かではない」

なおインドネシア人留学生の多くは、主に母国との比較の観点から、日本に「貧富の差」も「生活水準の低さ」も感じていない（第５章第１・２節参照）。

第４節　日本と母国の文化・社会・教育的諸問題

留学生・就学生は、母国と日本の文化・社会・教育にも様々な矛盾を再認識している。

第１項　中国人留学生・就学生

まず中国人留学生・就学生は、母国の文化・社会には、それほど問題は感じていない。ただ大卒者の一部に、中国の教育の遅れ、一人っ子政策による子供の自立性の欠如、中国伝統文化の保護の必要性等について、来日後、再認識した者が見られる。

＊「中国は、国がもっと国民の教育レベルを上げなければならない。国は、予算をもっと教育に使うべき。日本なら、どんな田舎に行っても、日記を書いたり、新聞を読んだり、詩吟をしたりしている。中国の農村には、字を読めない人が結構いる。教育は、勤勉さや社会の治安にも関わる。自分を尊敬し、他人を尊敬する教育が普及すれば、いい社会になる。日本の人達は法律的ということをよく知っていて、悪い事や無茶な事は、皆そんなにしない。社会の中でトラブルが少なく、組織だっている。社会がとても安定している。中国では、何が法律違反か、何が悪いことか、知らない人も多い。それにちゃんと仕事をする人材を育てないと、この国、この民族はどうなるのか」（日本政府国費）

「中国は、もっと国民の教育・文化に力を注ぐべき。中国には２億人以上、文盲の人がいる。日本は、教育を大切にしている。それに中国は１人っ子だから、甘えてしつけが難しくなっている。高校・大学・結婚まで親のそばで育てるから、なかなか独立できない。大学もすべて親の仕送りで苦労がないから、社会に出てからも自立しない。親の権力を利用して何かやろうというふうになる。それと、日本に来てから、中国の伝統文化を保護しなければならないと感じた。中国にいた時はあまりそんなことは考えなかった。日本人から、中国は古い文化・文明の母国とよく言われる。そういわれると誇りに感じるが、同時に、褒められて初めて、中国の伝統文化を守らないといけない、そうしないと中国は本当の姿を失うかもしれないと思うようになった」（文系大学院生）

「まず人民の教育水準を高めることが大切だ。人間の素養、文化・知識水準が変わらなければ。それと中国の文学・詩歌・劇・絵画・美術を見直した。日本にきて、日本の映画や漫画をみても、言葉の問題もあるが、それだけでなく、文化背景が違うから、内在的に感じる事が違う。改めて中国の伝統文化がいいなと見直した。伝統文化の保護だけでなく、発展が大切。筆で字を書くとか、そういったものがなくなりつつある。日本に来て中国文化について日本人から言われ、却って意識するようになった」（専門学校生）

むしろ、中国人留学生・就学生は、日本社会に様々な矛盾を強く感じている。それはまず、日本社会があまりに利潤追求の競争社会と化し、人間の「精神的・時間的ゆとり」が欠如してしまっていることである（第４章第２節参照）。またとりわけ、来日前、日本に肯定的イメージをもっていた私費留学生や就学生の間では、人間関係の希薄さ（第４章第３節参照）、情感と人間性の欠如、道徳・倫理の欠如、文化水準の低さ、刹那的・退廃的なマスコミ、男女差別、無意味な浪費等の問題が、より強く認識されている[3]。そしてこれらはいずれも母国の社会・文化の肯定的再評価と表裏一体である。

＊「来日前、日本は先進国で人民は礼儀正しく、教養があると思っていました。教育のレベルも高く、社会も安定していると思っていました。中国にいた日本人は紳士が多く、服装も態度も洗練されていました。でも日本にくると、日本は、表面的には教育をすごく大切にしているが、人々の生活目標は貧困で単調です。日本の一般民衆は、パチンコとかで時間をつぶしていて、何を大切にしているのかが見えません。文字が読めるとか、計算ができるとかいう方面では教育が普及していますが、文化・修養の水準は高くないです。そういえば日本では、外来文化に対して、自分の特色ある文化が少ないですね。経済はいいが、小説・詩歌・文化評論は世界ではまだまだです」（専門学校生）

「来日前、日本女性には、ある種のいいイメージがありました。東方の伝統の良妻賢母で礼儀正しく、優しいという感じ。でも来日後、私の働くスナックの日本人女性は、一応、独身なのですが、実際には4人の夫がいます。正式に結婚した夫ではなく、4人の男性の愛人になっているのです。彼女は39歳で、たくさんお金をもっています。子供もいます。『どうして結婚しないの』と聞いたことがありますが、彼女にもわからないそうです。中国だったら絶対だめだと思います。おかしいなぁと思います」（専門学校生）

「来日前、日本は教養が高く、衛生・礼儀・治安の点で優れていると思っていた。でも来日して、日本への見方はちょっと変わった。日本は、精神汚染がひどい。性の解放をしすぎる。普通の店で売っている雑誌や新聞にも、性の写真とか下品なものを載せている。以前、中国にいたときには、話には聞いていていたが、大したことはないと思っていた。日本にきて、そういう雑誌とかみて、やはり中国の方が正しいと思った。日本は中国から、もっと道徳と倫理を学ぶべき」（大卒専門職出身就学生）

「日本は繁華街に行けば電話ボックスに売春の案内が書いてあって、いろんな女性の写真がたくさんはってある。そういうのは女性がかわいそうだ。不平等で男中心。ポルノなんか詳しい事は知らないけど、当たり前のように普及している。週刊誌にもポルノみたいなものが公然と出ている。売れればいい、儲かればいいという感じが露骨に出ている。何か人間どうしの関係ではなく、女性はモノのようだ。テレビのドラマも、見てるうちに同じタイプしかないことがわかった。殺人とか浮気ばかり。日本では『赤い疑惑』のような人間の情感深いドラマをやっていると思っていたのに。がっかりした。それに日本のテレビはわざと笑わせる。意味がない。騒がしくておもしろいが、汚い言葉や悪い番組は子供にも悪影響がある。あまり見させるのはよくない。つまらない有名人のスキャンダルとか、うるさい時もある。要するに日本は儲かれば何でもいいという社会で、道徳に乏しい。日本人はよく日本が嫌いだというが、それは謙遜だけでなく、こういう根深い問題があって、自分の社会に誇りがもてないのではないか」（文系大学院生）

「私は弁当工場のアルバイトでサンドイッチを作ったことがある。その時、工場では、翌日の日付を貼って製造日をごまかす。最初、ミスだと思って注意してあげた。すると工場では、わかってやっていた。私は最初、これを悪いと思った。でも後で、そうしないと、注文の分がその日のうちに作れないことがわかった。それでも注文をこなしていかないと、会社どうしの競争で生き残っていけない。会社も、わかっていて仕方なくやっている。日本の社会制度の問題を感じた」（文系大学院生）

「日本には情感と人間性の問題がある。戦争が終わった時、中国人は日本人の残留孤児を育てた。その時は、日本が経済大国になるとか、わからなかった。そういう事と関係なく、戦争でひどい目にあっても、子供は一つの命として育てた。日本人なら、きっとこんなことはしないだろう。日本に残留した中国人や朝鮮人の子供を育てた日本人がいますか。戦争後も、中国人は日本人を軽視しなかったのに、なぜ、今、日本人は中国人を軽視するのか。多分、日本はすごく悲惨な所から急に発展したから、自己卑下から急に傲慢になったのだろう。昔の自分の事は忘れて、貧しい相手を馬鹿にするのだろう。日本人は自分を経済大国だと思っている。自分の意見、自分のやる事を、いつも正しいと思っている。こうして、自分で自分の首を締めている。これを続けると閉鎖的になり、だんだんつぶれるだろう。日本は経済が強いから、皆、付き合っているだけ。その事を日本は早く理解すべき」（大卒専門職出身就学生）

「日本人は変なところで贅沢。ごみの中に使える電気製品があったり、何か買っても贅沢な包装する。飴でも、まず一つずつ小さなビニールの袋に入れ、それを大きなビニールの袋に入れて売っている。それを買うと、店の人がまた袋に入れる。なぜ飴を3回も包装するのか。日本の一般の人はそんなに豊かでもないし、日本は資源も少ない国なのに、なぜそんな贅沢をするのか。理解できない」（専門学校生）

第2項　韓国人留学生－社会秩序と精神的成熟－

韓国人留学生は、来日後、秩序正しさ・精神的成熟・浪費の少なさ等、日本社会の精神的「豊かさ」と安定性を強く感じている[4)]。そして、それとの比較で、韓国社会に蔓延する利己主義、精神的貧困、

それらによる治安の悪化等の問題を指摘している。

＊「私の来日前の日本人観は、日本にも結構知られているステレオ・タイプだった。日本人はけちで、排他的で、西洋コンプレックスで、凶暴だとか。だけど、こちらに来て、そういうイメージはだいぶ変わった。日本は人が多いけど秩序がある。ごみがなく、どこもきれい。日本人は自分だけじゃなくて、回りの人のことを考え、気を使い、勤勉にまじめに生活している。ゴミを出すときも分別してきれいに袋に入れて出す。こうした事で社会も安定している。精神的な余裕がある。経済的な余裕もあるけど、こういう精神的な余裕を私も身につけたい。これは、なぜ日本が強くなったかにも関係がある。実際に生活してみて、日本人のイメージはいい方に変わった。日本の生活にはむだがない。きちんと合理的に浪費なく生活している。けちなのではなくて、いい意味で質素に生活している。また日本人は利益ばかりを追求するのでなく、いろんな人がいる。すごく一生懸命な市民運動の人もいる。周りの人達は私に『それは少数の人ですよ』と言うが、それでも40歳代で勤めながら市民運動を一生懸命やる日本人は偉いと思う。韓国では、最近まで出国が自由化されていなかった。ビジネスマンしか海外に行っていなかった。だから日本についても、そんな側面しか伝わってこなかったのだろう。日本に比べると韓国は心配事が多い。まず犯罪が多く、治安も悪い。女性が夜に一人で歩くなんて、とんでもない。考え方の問題がある。結構最近は自分の事ばかり考える。そういう所から社会が不安定になっている。時間はかかるが、一人一人の家庭でちゃんとした精神面の教育を考え直さないと。警察の力で一時に安定を図るのは無理だ。意識を変えなければ。皆、自分の利益ばかり考え、社会全体の事を考えなくなっている。政治家も仲間の利益を考えている。労働者も自分の利益を考えている。先生も組合を作って自分の事ばかり考えている。発展途中だから、やはり問題が多い。意識の転換が必要。韓国人は何か悪い事があったら、それをすぐ社会の問題と考える。自分が悪いと考えない」（国費）

「日本は、経済だけでなく、意識も大国だ。経済大国を支える国民の勤勉さがある。消費中心ではなく、いい意味で質素だ。韓国の大学の女性は、服や化粧に金をかけすぎる。日本は皆、贅沢をしていない。質素で勤勉に生活していて、社会に秩序があり、治安もいい。韓国にいた時に考えていた日本人のイメージとは違う。物質面だけじゃなくて、精神面のゆとりを含めると、日本はやっぱり豊かだと思うようになった。例えば日本のマスコミは、犯罪者の顔を見えないようにしたり、直接、名前をわからないようにして、人権を守る。これはいいことだ。韓国は、犯罪者の顔や名前を出して、関心を煽る。80年代以降、韓国社会はずいぶん変わった。人間の精神的な余裕がなくなった。精神的に貧乏になった。人間社会としてまずい。教育が問題だ。中学からずっと試験を受けて、学校に進学する。勉強ばかりで、趣味とか、人間として必要な教育が足りない。それが一番問題。学歴社会で、大卒・高卒・中卒で給料に大きな差があるから。経済成長だけじゃなく、他のことも大事にしなければ。韓国は、人に対する優しさがかけている。むしろ日本から学ぶべき。日本にいる自分から見ると、そう思う」（私費）

第3項　インドネシア人留学生

インドネシア人留学生には、一方で、韓国人留学生と同様、日本社会の公共性・秩序正しさ・社会安定を肯定的に評価し、それと表裏一体で母国の社会不安・感情的な国民性に問題を感じる者が見られる。しかし他方、日本社会に対して、その無宗教・道徳的価値の欠如・天皇制の固有の迷信・浪費・個人主義等の面で否定的に評価し、母国社会の長所を再確認する者もいる。

＊「日本は市民に公共心がある。規則を守る人が多い。バスや電車に乗る時も、きちんと並ぶ。日本みたいに品が店に並んでいて、それを客がレジの所にもっていくスタイルだったら、インドネシアなら皆、盗まれてしまう。持って行ってしまう。インドネシアの人々は感情的で秩序がない。日本でデモを見たが、整然としている。インドネシアなら店など焼いてしまう。多分、日本は、小さい時からの教育で、セルフ・コントロールがうまくできるのだろう。小さい時からの人格形成・教育をよくすれば、社会もよくなる。インドネシアで公共施設やルールを守るのは、公務員の係の人だけ。私は、どうやったら皆がルールを守るようになるか

知りたい」

「日本は、こんなに先進国なのに、宗教のことは何も考えていない。日本はスーパー・コンピュータを作っているのに、天皇のことを神様だと思っている。それが理解できない。一つの偶像を拝むだけでは何もできない。もっとユニバーサルなものを考えた方がいい。自分の人生が何のためなのか。私がイスラムのお祈りをしていると、『何でそうするの』と、よく尋ねられる。でも私は逆に『日本人にとって人生の意味は何ですか』と聞きたい。死ぬまで働く、それだけかと思っている。死んでからどうなるのか、考えた方がいい。それに日本は子供がテレビを見ているプライムタイムにも、変なCMとか映している。何を考えているのかと思う。日本人は無駄遣いが多く、物を捨てやすい」

第4項　マレーシア人就学生

そしてマレーシア人（中国系）就学生は、まだ日本や母国の社会については、よくわからないと感じている。ただし、その中でも彼らは、中国人と同様、日本社会が利潤追求に走るあまり、「精神的時間的ゆとり」を見失い（第4章第2節参照）、浪費等の問題も生じていると感じている。

＊「日本に対していろんな夢があった。日本は何でもいい、何でも奇麗と思っていた。でも日本に来てから、日本は経済と科学技術だけで、他の面はあまりいいと思わなくなった。新宿の若い人等、贅沢で浪費しすぎいる。忙しくて精神的ゆとりがない。いくら日本がよくても、やっぱり自分の国が好きです。祖国が一番いいと思うようになった」

第5節　侵略戦争の歴史認識

最後に、アジア系留学生・就学生にとっては、多かれ少なかれ、第2次世界大戦における日本のアジア侵略の歴史、及び、それに対する日本人の歴史認識を如何に受けとめるかが問題となる。

第1項　中国人・インドネシア人・マレーシア人の留学生・就学生

まず中国人・インドネシア人・マレーシア人では、総じて、来日前、侵略の歴史は日本社会観の中でそれほど大きな位置を占めていたとはいえない。もとより、彼らがそうした歴史に無知であったわけでは決してない。むしろ侵略の歴史認識は、彼らにとって自明であった。だからこそ、来日後、この問題についての彼らの認識は、日本での体験に応じて大きく2つのタイプに分かれる。

即ち一つは、来日前に比べ、この問題に関する日本人像が改善されたタイプである。これは、一部の日本政府国費留学生、理系大学院・私立大学の私費留学生等、来日前に比較的、この問題を重視していた者に多い。ただし、この場合、必ずしも日本人側の具体的な歴史認識をふまえた日本人像の改善というより、来日前、映画・テレビ・年配者の話で接した「恐ろしい凶暴な日本人」のイメージが変わったという感性的レベルでの変化であることが多い。

＊「来日前、本当は日本のイメージはあまりよくなかった。第2次世界大戦で、中国を侵略したから、昔の軍国主義支配のイメージ。その後、日本では民主的な憲法ができたが、考え方や思想は長く残るので、そういうイメージがなくなるには時間がかかる。来日して、中国の昔の映画のような日本人観は変わった。皆、非常にいい人だ。今も、侵略的な考えをもっている人もいるかも知れないが、若い人の中では少ない。民主的な考えが広がっている」（中国人・日本政府国費）

「来日前は戦争の頃のよくないイメージ。戦争責任についての考えは、中国人一人一人がもっている。でも、昔の戦争は、これはしょうがない。人民ではなく、政府の責任だ。今の若い人はあまり気にしない。私達、若い人達が交友して、よく理解することが大切。実際、来日して残酷とか怖いというイメージは変わった」（中国人・理系大学院私費）

「来日前、日本人のイメージはよくなかった。第2次大戦のときのイメージがあるから。小説や映画や教科書でも残酷な人というイメージがある。戦争の時のことを、父や職場の目上の人から教えてもらっていたし。来日後、父達の言ったことは、今の日本人と少し違うと思った。今の日本人はそんなに怖くない」（中国人・私立大学生）

「昔のことかも知れないけど、高校まで歴史を習う。オランダと日本とインドネシアの関係について。日本のイメージは大量虐殺。オランダは350年いたが、そんなに殺さなかった。日本はインドネシアにいる時、激しく殺した。日本の憲兵隊に連れて行かれると戻ってこないという話は有名。来日して、イメージは変わった。日本の国も変わったのかも知れない。警察官の姿がそんなに見えない。小さな交番しかない。今の日本人を見ていると、どうして昔はああいうことをやってしまったのかと思う。今、実際に見ている日本人は、テレビのドキュメンタリーに出てくる日本人と全然違う。昔は軍事力で、今はそれが経済力に変わっただけだという意見もあるが、やはり軍事力と経済力は違う。それに日本人は、単なるエコノミック・アニマルではない。我々は、今、前向きに日本人から勉強すべきだ」（インドネシア人留学生）

これに対し、来日後、アジア侵略の歴史認識が日本人の間で風化していることを知り、むしろ改めて問題を強く認識したタイプもある。これは、中国政府国費留学生や文系大学院私費留学生に多い。彼らは、特に日本の大学の若者や政治家の歴史認識の欠如に問題を感じている。

＊「日本人の戦争観には2つあるようだ。一つは『確かに悪いことをした』。もう一つは『もう過去のことだから忘れてしまって下さい』。今の若い人達は、もう忘れた人が多い。私は、忘れてはいけないと思う。教育の中で歴史を正しく教えなくてはいけない。若い日本人はあまり歴史を知らない。中国の人達は、若い人達でも、とにかく忘れていない。2度とそういうことが起こらないようにしている。『知らない』『関係ない』という人はいない。学校も教えるけど、親・おじいさん・おばあさんも教えるんですよ。母の家は河北省で日本軍が入った所で、昼は山の奥へ隠れないと、日本軍に見つかると皆、殺される。鶏を飼っていたんだけど、山から帰ったら、皆、食べられていた。私の大学の先生も東北、昔の満州だから、小さい頃、日本語を教えられたから、今でも少し日本語ができる。日本語を教えたくない先生は、皆クビにされた。日本人と中国人の意識には、かなりギャップがあることがわかった。こういうことは日本の学生と話すと気まずくなるから、できるだけ話さないようにしている」（中国政府国費）

「僕が日本に来てからも、日本の政治家が何度か問題発言をした。総理大臣でも誰でもいいから、一度、南京に行ってみればいい。そこで謝ればいい。そうすれば中国人はすぐに恨みなんか忘れるだろう。日本人の学生には『私は生まれてなかったから』という人が多い。私は、そういう人には、『あなたは親から遺産を受け継ぐのでしょう。遺産の中にはいいものもあれば悪いものもあるのですよ。日本国民であるということは、いい歴史も悪い歴史も含めて受け継ぐということですよ』と言いたい。靖国神社に行くと、盧溝橋事件の説明が書いてあった。日本の国益のために進出したとか、ソ連との対立とか、書いてあった。国益を守ることや、死んでしまった家族を祭りたいという気持ちは理解できるが、そのために何千人もの中国人が殺されたことも、ひとこと書いてあってもいいのではないか。祭りで自衛隊の基地に行ったら、『北京で日本軍を歓迎する中国人』の写真が張ってあった。それは強制的に歓迎させられているものなのに、おかしい。今もこんな写真があるのかと信じられなかった」（中国政府国費）

「私は、来日前は、そんなに日本の侵略の事を考えていなかった。もちろん事実は知っていたが、私達の世代にとっては、日本侵略より文革の影響の方が身近で大きいから。でも、来日後、過去の戦争について、時々、考える機会があった。私達の認識と、日本政府の認識に違いがあることがはっきりしたから。日本政府には昔に対する反省がない。中国人は、表には出さないけど、何かあった時にはそれが表面化する。中日の関係は、各界の民間どうしの努力ですばらしい成果があるが、中国人の感情的な反発を引き起こしやすいのは、過去の不幸な歴史。日本の政治家が、その不幸な歴史を否定するような言動をしばしばする。そういう事は

避けてほしい。それと特に今の若い人。私が直接、接した人では、年配の人は中国に対してある程度の反省、特別の思いをもっている。だから中国と関係を深めようという人には年配の人が多い。これはうれしかった。若い人はそれがないから、中国にも無関心」（中国人・文系大学院生）

なお中国人の文系大学院生には、広島の原爆記念館を訪問し、侵略戦争における日本国家の責任と日本国民の被害を区別して考えるようになった者もいる。

＊「広島の原爆記念館に行って、考えが変わった。それまで日本に原爆が落とされたのは、自業自得だと思っていた。中国に悪いことをしたから、そんな目にあうと思っていた。でも原爆の被害を受けた人達は、普通の国民で全くの被害者。責任があるのは日本の政府で、その人達ではない。その人達はどうしようもなかった。そういう人達に対してアメリカが原爆を使ったのは、１人の人間として許せないと思うようになった。原爆を落とした後、アメリカが治療のための薬を贈ってきたという展示があったが、そんなことをするくらいなら最初から原爆なんか落とさないで下さいよと思った。今も原爆の後遺症で苦しんでいる人がいる。その人達は、決して自業自得で苦しんでいるのではない。戦争は、中国だけでなく日本の人民にも大きな被害をもたらしたのです」

第２項　韓国人留学生

韓国人留学生では、来日前、侵略戦争・植民地支配の歴史が、日本に対するイメージの中で最大の位置を占めていた。しかし彼らの多くは、来日後、そうした日本・日本人像が「ステレオタイプ」であったと感じている。

＊「来日前は正直いって、韓国人にとっては日本は悪いイメージがある。過去の関係上、いい印象は持てない。韓国の場合、教育の事情で誰でも昔のことを思い浮かべてしまう。韓国にいる時には、昔の親の世代の体験しか聞いていない。私ももちろん、学校で習った価値観で歴史的なことは思っていた。日本は昔、悪いことをやって、しかも反省していないというイメージをもっていた。でも、来日して考えは変わった。今、日本にいて、歴史のことはあまり考えない。やっぱり今のことに関心がある。今の日本で生活してみると、日本人はけっこう優しくて親切。日本の印象はいい方向に変わった。歴史の問題は、時間がたてば解決すると思う。来日前は、凶暴だとか、ステレオタイプだった。戦前のイメージが強すぎて、現在の日本については、よくわかっていなかった」（国費）

「一般的に日本は韓国では嫌われている。韓国人は皆、同じだと思うけど、教育の問題もあって、日本といえば侵略の歴史、植民地のイメージ。私も嫌いだった。植民地時代があったから、日本の歌も映画も禁止されている。私が日本に留学すると言うと、子供の友達から『なぜ日本なんかに行くのか』と聞かれた。来日してみるとイメージのギャップが大きい。今までは間違っていたと思う。韓国人は日本のことを知らないのに、無条件に嫌っている。ただ韓国でも、若い人は日本の歌やビデオを見ている。年寄りは植民地時代の経験があるので、日本文化が入ってくるのを恐れている。若い人は、日本と交流しても大丈夫。私はもっと文化交流して、相互理解を促進することが大切と思う。日本の歌とか映画とか韓国でやってもいい。歴史の問題はだんだん薄れるだろう」（私費）

とはいえ、日本にあえて留学した彼らは、来日前から、日本に対する悪印象が、韓国人の中では比較的希薄な層であったと思われる。また彼らの日本・日本人観の変化も、前述の中国人等の第１のタイプと同様、日本人の具体的な歴史認識をふまえたものというより、むしろ「それほど凶暴ではない」といった表面的・感性的なイメージの変化にとどまる場合が少なくない。さらに韓国人留学生の一部には、天皇制に象徴される国家意識の面で、戦前と戦後の日本社会に連続面があることを指摘する者もいる。

＊「来日後、天皇制の問題の複雑さがわかった。日本人は、口では、もう天皇制は関係ないと否定するが、やっぱり天皇制は、日本人の生活や考え方・世界観を捉え、支配している。それは一つには、日本中心、日本の事だけという考え方。日本は、昔も今も侵略で強くなった。昔は武力で、今は経済で。日本人は昔と今は違うと言うが、どちらも外国から富を得て、そのための体制を固めて、強くなったという点は変わらない。方法が違うだけ。日本が強くなる分、アジアの他の国は弱くなった。日本は、日本の事だけ考えるのでなく、同じアジアとして皆が豊かになるように援助してほしい。もう一つは、日本の中でも『おかみ』意識というか、国に対する意識が戦前と同じみたい。地方自治など形だけ。大学も国立優先。私立はだめと言われる。地方が中央に依存して、国家規制型。国家官僚がすごく強く、市民運動や自治体が問題を提起しても、国家のレベルにまで通じない。この点は、戦前とあまり変わらないのではないか」[5)]

そして韓国人留学生の多くは、現在の日韓関係にも、「壁」があり、「過去は清算」しきれておらず、「平等な関係」は未確立だと感じている。これは、韓国以外の留学生・就学生にはあまり見られない特徴であり、植民地化・侵略の歴史が現在に刻印する影響の一つと考えられる。

＊「韓国と日本は、やはり今も近くて遠い関係だ。一番近い国だが、壁がある。一人一人が壁を作っている。表面的には仲良くやっているようにみえるが、いろんな問題が残されている。それを一つひとつ解決するすることが大切で、そのためにはお互いにもっとよく理解する必要がある。大統領がきたとき、過去を清算するといったけど、今までは平等な関係だとは思わない。今は日本も韓国も、アメリカとの関係ばかりだが、もっと直接に韓国と日本が交流を強めていく必要があると思う」

《補注》

（1）貿易関係の仕事に就いていた中国人就学生も、「日本も少しは、他国の事も考えなければならないと思っていた。特に発展途上国への援助等。日本人は、他国の習慣とか理解できない。そういう国際性が乏しい」と語る。

（2）一部には、こうした否定的イメージの改善を指摘する者もいる。「ＯＤＡとか、日本の工場とか結構できて、インドネシアの日本文化センターも日本のことを教えてくれる。インドネシア人の日本のイメージもこれからはよくなっていくんじゃないか」。

（3）中国人の国費留学生や理系大学院私費留学生が日本に抱いていた肯定的イメージは、「山口百恵」・「桜と富士山」等、かなり曖昧なものであった。「日本のいいイメージは、山口百恵さんのドラマ、『赤い衝撃』による。日本の女性は優しく、日本の若い人々は素晴らしいと思った。すごくよかった」。

（4）ただし一部に、日本社会の秩序正しさに物足りなさを指摘する意見もある。「韓国の方が社会に活力がある。他の人が見ると不安定だというかも知れないが、日本は安定しすぎている。日本は学生運動もない」。また日本のマスコミへの否定的評価もある。「日本の報道はあまりに軽い。人権をちゃんと考えているのか。何でも見せるのはいいが、原則が必要だ。日本は娯楽性が強すぎる。クイズで３つ答えた人が、５つ以上答えた人を追い越してしまって、そういう努力を台なしにするようなやり方は、こんなのでいいのかと思ったりする。子供大会とか、子供をあんなに売っていいのかと思う。朝の番組でも殺人事件ばかり。朝から気持ちが悪い」。

（5）なおこの意見の持ち主は、「地方自治が弱いのは韓国も同じ」と指摘している。

終章　留学生・就学生の人生観と将来指向

本章では、留学生・就学生の人生観、留学の成果に関する自己評価、及び、それらをふまえた将来

指向について明らかにする（表6－1～2参照）。

第1節　人生観とその変化

まず、人生観、人生で重視する価値とその変化を見る。

第1項　中国人国費留学生

中国人国費留学生は、来日前から、「金銭より趣味・ゆとり」、「仕事より家庭生活」、「個人の自己実現より国・社会への貢献」をそれぞれ優先する人生観をもっていた。また「国・社会への貢献」と「個人の自己実現」は切り離せないとの考えも強かった[1)]。来日後、こうした人生観は一層強まっている。

＊【金銭より趣味・ゆとり／仕事より家庭】

「お金はいくらあっても満足することはない。お金がなくても、いい仕事とか趣味とか友人とかあれば、それだけで満足できる。いくらお金があっても、精神的に貧しいと、全然意味がない。物質的には望まないが、精神的には充実したい。だから仕事も家庭も両方必要だが、あえていえば家庭が大事。留学したからといって基本的にこういう考え方はそれほど変わるわけじゃない。ただ一般的には、来日前は日本は経済大国と聞いて、皆、誰でも豊かな生活にあこがれる。でも、今はこんなにお金があるけど、家族が懐かしくて、ただお金だけが大事じゃないことがますますわかった」（日本政府国費）

「お金は、生きていければ十分だ。生活のゆとりは、お金だけでは得られない。私の親は仕事をしているが、日曜は絶対に仕事をしない。家族全員でテレビを見たり、食事をする。家庭が幸せでなければ仕事はできない。家庭が大事。学歴が高い人の方がそういう考え方の人が多い。今後はもっとのんびりしたい。実際、留学してみてもっとそう思う。今は忙しすぎる」（中国政府国費）

【個人より国家・社会】

「僕は小さい時からいつも、中国のために、中国が豊かになれたら、僕は何をやってもいいと思っていた。こっちにきてから、もっとそう思った。国が豊かでなければ、自分も充実しない。今、アメリカは国が豊かだから、皆、目を向ける。中国人は悪いわけではないが、国が貧しいから皆、こういうふうに見ている。だいたい個人の能力の大部分は社会的に使うものだ。知識や能力は、社会に貢献しなければ、うまく使えない。私は自分のもっているものを利用して、国や社会のためにいろいろできると思う。それは個人にも還元される。貢献した結果、出世するのも当然。自分のことと社会のことが別れてしまったら、よくない。留学しても考えは変わらない」（日本政府国費）

「今まで、国にお金を出してもらって勉強してきた。毎月８万円の奨学金は、中国では大金。１カ月の給料の30倍。何とか恩を返さなければ気が済まない。親も、恩は必ず返せと言ってる。だいたい国や社会のためというのと、自分のためというのは、同じじゃないか。国や社会の発展のために自分の力を役立てれば、同時に自分の人生も充実する。普通、自分の人生が充実していれば、国や社会の発展にも生かせると思う。よく勉強をして、国にいいことをする。それができれば本当にうれしい。もちろん皆がそれを認めてくれればもっとうれしい。こういうことで考えは変わらない」（中国政府国費）

しかし同時に、国費留学生、特に日本政府国費留学生には、来日後、「国・社会より個人」、とりわけ個人の金銭獲得を重視すべきではないかという葛藤も生まれている。これは直接には、日本への留学体験の結果というより、中国社会自体の急速な変貌・改革開放に対応したものである。しかし同時に、彼らが日本で高額の金銭を入手しやすい立場にいることも間接的には作用している。

＊「中国も今は金儲けの時代だ。僕は金儲けには無関心な人間だが、社会全体がそういう方向に向かっている

表6－1　生き方・自己変化・将来指向（大学・大学院留学生）

			来日前						来日後	留学で得たもの									留学後の進路						橋渡しとしての役割	
			a	b	c	d	e	f	g	変化	A	B	C	D	E	F	G	H	I	その他	あ	い	う	え	お	その他	イ	仕事	仕事以外
中国国立大学	日本政府国費	①		○		○	△	△		－	○		○	○						友人の大切さ	○						○		日本語教える
		②		○	○		○			a d			○								○				○		○	留学促進	
		③		○	○		○			－			○								○						○		日本の習慣紹介
		④	△	△	△	△	△	△		a f			○							文化社会比較	○		△	△			○		人間の交流
		⑤		○	△	△	○			f		○	○	○		○					○						○		日本社会の様子紹介
		⑥	△	△		○	○			a			○										○				○		
		⑦		○	○		○			－	○		○	○		○				意志	○						○		日本語教育・交流促進
		⑧	○		○			○		b e	○	○	○	○		○					○						○	日本語教育	
		⑨	○		○		○			－	○	○	○	○							△	△	△		△			相互理解促進	
		⑩		○	○		○			－			○	○							○		△				○		
	中国政府国費	①		○	○		○			－	○		○		○		○				○						○		
		②		○	△	△	△	△		－	○		○								○						○	技術紹介	日本社会の様子紹介
		③	△	△	△	△	△	△		－	○	○	○	○	○		○				○						○		友人旅行受け入れ
		④		○	○		△	△		g	○	○	○	○	○	○					○						○		日本社会の様子紹介
		⑤		○	○		○			－	○		○		○						○						○		
	私費 理系	①		○	△	△	△	△		－			○		○						△	△			△			わからない	わからない
		②		○	△	△		○		－			○		○	○					○				○		○		日本人との交流
		③		○	△	△	△	△		－	○	○	○	○							△	△	△		△			仕事交流	文化交流・相互理解促進
		④	○		△	△		○		e					○						○				○		○		若者の交流
		⑤	△	△	△	△		○		－				○						変わった	△	△	△		△		○		友誼増進
	文系	⑥		○		○		○		e			○	○							△	△			△			中日友好交流	
		⑦	○		△	△		○	○	e								○				○	○					経済交流	相互理解促進
		⑧		○	○		○			f	○	○		○				○		学問観	△	△	○		○			相互理解促進	
		⑨	○		△	△		○		－								○		生活知識増大	○		○				○	留学促進	
		⑩	△	△		○		○		b			○	○	○	○		○			△	△	○		○	日本結婚		相互理解促進	
		⑪	△	△		○		○		e			○	○				○			△	△	△		△			相互理解促進	
私立大学	私費	①	△	△	△	△		○		－				○	○	○						○				香港就職			
		②	△	△	△	△		○		－			○			○							○	○	○				
		③		○		○	△	△		－	○	○	○			○						○			○			経済交流	文通翻訳などボランティア
		④		○	△	△		○		－			○								○		○	○					
		⑤		○	○			○		－		○				○						○	○	○		日本結婚			
韓国国立大学	日本政府国費	①		○		○	○			c	○	○	○	○			○				○						○		商売・貿易等
		②		○		○	○			f	○	○	○	○		○	○				○							日本の実像伝達・日本文化や日本語教育	
		③		○		○		○		－				○							○			○			○		友誼増進
		④		○	△	△	○			－	○	○	○	○		○				家族への感謝	○						○		
	私費	⑤		○		○		○		－	○	○	○	○		○					○							特になし	
		⑥		○	△	△	○			－			○	○		○	○			意欲	○						○		学生に日本の実情を紹介
		⑦		○		○	△	△		－	○	○	○				○				○						○		日本での経験を紹介
		⑧	○			○	○			g		○	○		○		○				○				○			留学促進	日本理解の是正
		⑨		○		○	○			－			○				○				○							わからない	わからない
インドネシア	日本国費	①	△	△	△	△	△	△	○	g	○		○	○					○	日本文化観察	○							国際協力	人間交流・教育情報提供
		②	○		△	△	△	△		－				○		○						○	○					わからない	観光客の案内
	母国政府国費	③		○	○			△	△	－	○		○						○	勤勉・効率性		○		○	○			わからない	観光案内・母国紹介
		④		○	○		－	－	○	g			○			○			○		△			○	△			情報交流・相互批判	
		⑤		○	△	△	△	△		g	○		○			○			○			○	○						双方社会紹介
		⑥		○	○		○			－	○			○		○			○	家族への感謝		○		○	△		○	知識伝達	日本のモラルを守る

注）a＝金をたくさん稼ぎ、経済的に豊かな生活をしたい、b＝貧しくても趣味を大事にしたい、c＝仕事より家庭を優先したい、d＝家庭より仕事を優先、e＝自分の知識・能力を国・社会のために役立てたい、f＝自分の知識・能力で自分の人生を充実させたい、g＝その他／　A＝異文化の理解、B＝自分の生き方に対する新たな視点、C＝高度な専門知識、D＝日本人の友人、E＝視野の拡大、F＝自信・自立性、G＝人間関係観の変化、H＝苦労の体験、I＝規律・時間厳守、（日本・母国に対する新視点については、別表参照）／　あ＝母国の大学・研究所で研究教育職、い＝母国でその他就職、う＝日本で就職、え＝日本で進学・研修、お＝他国に留学／　イ＝研究交流

実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースNOは表毎に不統一。

と不安になる。僕の中国の大学時代の先生は優れた研究者だった。以前、その先生に『研究で儲かりましたか』と質問すると、彼は『研究は金儲けの手段ではない。国家社会に貢献するためにやるのだ』と怒った。私は、当時、この先生を尊敬し、そういう人間になりたいと思った。でも、私が留学後、一時帰国した時、その先生は大学をやめ、自分の開発した技術を売る会社を作っていた。そして私が将来のことを相談すると、『せっかく外国にいるのに、すぐに帰るのは馬鹿らしい。金をいっぱい稼いでから帰れ。そうすれば技術開発の会社も作れる』と言った。僕はがっかりしたが、それが今の中国の現実なのだとも思った。中国にいた時は、給料も高くないから、あまりお金とか考えなかった。でも日本で生活すると、中国にお金をもって帰ると大金だから、そういうことも考えるようになった」（日本政府国費）

第２項　中国人私費留学生

中国人私費留学生は、来日前から「国・社会への貢献」という意識は希薄で「個人の自己実現」を重視していた。それは来日後、一層強くなっている。

＊「国や社会のためという前に、やっぱり自分の人生を充実させる方が大事。今の中国では、それが難しいから。日本にくると、一人一人の人生はあるけど、国の人生などないとよくわかった。中国では違う教育を受けてきた。私達の親はかわいそうだ。40年も50年も血と汗を流して国のため、共産党のために尽くしてきたのに、私達の世代からはいろいろ言われ、結局、否定されることになるから」（文系大学院生）

ただし、それ以外の人生観は、私費留学生の中でも属性毎に多様である。

即ちまず理系大学院生・私立大学生では、「金銭より趣味・ゆとり」を重視し、「家庭生活と仕事の両立」を図ろうとする指向性が来日前から強く、来日後、それらは一層強化されている。

＊「金持ちになる気はない。普通に仕事をしていれば、そんなに貧乏にはならない。お金がないのはいやだけど、人間の生活は金のためじゃない。やりたいことをやるために人生はある。金がありすぎると却ってよくない。生活できる金があれば、自分のやりたいことはできる。日本にきて、もっとそう思った。日本では確かに皆、金持ちだけど、心や人情は空しい。人生は短いから、やっぱり自分の人生を充実する方がいい。家庭と仕事はどっちも大切。日本の考え方では二者択一になるかもしれないが、中国では２人で働いているので、仕事がちゃんとできたら、家庭もうまくいく」（私立大学生）

他方、文系大学院生は、「金銭」と「趣味・ゆとり」を重視する者が相半ばし、また「家庭生活より仕事を優先」と考える者が多い。総じて、経済的豊かさと自己実現の両方を追求し、そのためにも仕事に力を入れたいと感じているのである。ただし彼らは前述の如く、客観的には家事・育児にかなりの時間を割き、研究時間不足に悩んでいた（第２章第４節参照）。彼らが「家庭生活より仕事を優先」したいと念じるのは、こうした現実の反映でもある。また彼らの半数は、来日後、「個人の自己実現」のためにも「国・社会への貢献」が不可欠だと考えを改めている。

＊「日本にくる前は、国についてはがっかりするばかりで、国のためなんて考えられなかった。日本にきて、自分の国のために何かやらなきゃと思うようになった。誰も何もやらないと、もっと悪くなる。日本にきてみると、経済がとても発展していて、人々の生活も明るい。中国人は頑張って追いつかなければという責任感が湧いてきた。自分の能力や知識を、中国の困った人のために役立てたいと思い始めた」

そして専門学校生は、「趣味・ゆとりより金銭」、「家庭生活より仕事」を優先する者が多い。総じて、金銭獲得の手段としての仕事を重視している。中には、来日後、金銭の重要さを一層強く認識し、自ら「金銭至上主義になった」と語る者もいる[2)]。

＊「日本で経験を積んで、お金がないと自由にならないという事がよくわかった。日本はお金の社会だから。お金をもっていてこそ自由もある。私はお金がないから、好きな専門学校にも行けなかった。やっぱりお金が大切だ。私の友達も、日本にきてから、お金のことばかり言うようになった人が多い。でもそれは、仕方がないこと。現実がそのように人間を変えるのだから」

「私だけでなく、中国人の多くが、日本にきてから、いろんな意味でずるくなったと思う。漢方薬とか『101』とか偽物の薬を高く売り付け、もっぱら金儲けしている人もいます。お金のために愛人になるとか、偽装結婚とか、もし中国にいたら絶対そんな事はやらなかったような人が、日本ではしています。偽装結婚すれば、日本国籍も取れるし、外国の国籍をとって華僑として帰国すれば、何かと有利ですから。今、東京では、日本の金持ちの男が愛人として中国人の女性を養うという事も珍しくない。女性のために生活費を出すとか、マンションを借りてやるとか。男性には妻子がいる。結婚する気はない。中国人女性の側からみると、

表６－２　生き方・自己変化・将来指向：就学生・専門学校生

			来日前						来日後の変化						進路希望					将来の仕事希望				日本企業就職希望						
			A	B	C	D	E	F	あ	い	う	え	その他		イ	ロ	ハ	ニ	ホ	1	2	3		4	5	a	b		c	d	e
中国	専門学校	①	○			○	○	○	－				実事追求					○		○	○		機械製造	×	○	○	△		△		
		②		○		○			A				協力精神						○		○	○	未定	×	×	○					△
		③				○			－	○						○				○			貿易	×	△		○	1年			
		④		○		○			A	○									○			○	音楽	×	×						○
		⑤	○	○	○	○			－	○						○				○			元職場勤務・服装店経営	○	○					○	
		⑥				○		○	－	○						○				○			貿易	×	○					○	
		⑦		○			○	○	－	○		○	辛さ理解			○				○			翻訳・図書館経営	×	○				○	△	
		⑧	○		○	○			－				○	礼儀・センス					○	△	△	△	服装	○	○						○
		⑨	○					○	A	○			○	職業展望		○		○		○			貿易	○	○		○	10年			
		⑩	○		○	○			－					節約・公共性		○		○	○				香港・建築デザイン	×	○						○
		⑪	○		△	○			－					礼儀				○				○	未定	×	○						○
日本語学校	大卒以上	①		○		○		○	－	○				民族の誇り				○		△	△	△	工業技術研究	×	○		○	2年			
		②	○			○			A					能率				○		○			建築関係国際交流	×	○		○	2年			
		③		○				○	－	○								○		○			会計	×			○	3年			
		④		○		○			－	○								○		○	○		マスコミ	×	○				○		
		⑤				○		○	－	○		○		能率				○		○			プログラマー	×	○					○	
		⑥		○				○	－	○	○			進学断念				○		○	○		機械設計	×				○			
		⑦		○					－					協力精神				○		○			大学教師	×						○	
	高校・中専卒	⑧			○	○			－					政治的自由				○		○	○		貿易	×	△		○	2年			
		⑨	○				○		A		○			金銭重視			○			○	○		自営業	○	○	○					
		⑩				○		○	－			○						○		○	○		経済関係	○	○		○	5年			
		⑪			○	○			－	○								○			○		貿易	○	○		○				
		⑫		○	○		○		－	○								○		○			教育	×						○	
		⑬						○	D	○				礼儀				○		○			ウェイトレス	○	○					○	
マレーシア	日本語学校	男性①		○				○	－	○								○		○			未定	×			○	3年			
		②	○			○			－		○							○		○			牧場自営	×					○		
		③	○					○	－		○	○						○		○			ホテル	×	○				○		
		④		○				○	－	○								○		○			会社員	×			○	2年			
		⑤						○	－									○	○	○			経営	×			○	1年			
	女性	⑥		○		○			－					協力精神				○		○			化学工場経営	×			○	2年			
		⑦			△	○			－	○		○						○			○		貿易勤務	×			○	5年			
		⑧	○						－			○						○	○	○			経営	×				○	○		
		⑨		○	○				－					服従精神				○		○			経営	×	○		○	1年			
		⑩	○			○			－	○				能率				○		○			経営	×	○					○	

注）A＝お金をたくさん稼ぎ経済的に豊かな生活をしたい、B＝たとえ貧しくても趣味を大事にのんびり生きたい
C＝家の伝統を守り両親を大切にしたい、D＝技術を磨き仕事一筋に生きたい、E＝困っている人を助け
社会に役立つ生き方をしたい、F＝母国国家の発展に貢献する生き方をしたい
あ＝勤勉・責任感、い＝先進技術、う＝経済発展、え＝市場感覚、
イ＝母国の大学・研究所で研究・教育職、ロ＝母国でその他の就職、ハ＝日本で就職、ニ＝日本で進学、
ホ＝他国に留学・移住
1＝母国、2＝日本、3＝その他、4＝来日前後で変化、5＝日本の生活・学習は役立つか。
a＝日本に永住して日本企業で働きたい、b＝一定期間、日本で働き、母国に帰りたい、
c＝中国にある日系企業で働きたい、d＝母国に帰り、母国の企業で働きたい、e＝他国(香港を含む)に行く
実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースＮＯは表毎に不統一。

来日してから、物価や学費が高くて、なかなか勉強できない。バイトしてもなかなか貯金できない。勉強も貯金もできないと、何のために来たのかわからない。将来、何もできない。それで、自分でも悪いとわかっているけど、相手から１カ月何十万円ももらって貯金して、２年位して帰国すれば、金持ちになれる。それなら損じゃないと考える。男には愛人、女には貯金、両全其美（両方にメリットがある）ですね。こういう人が、私の友人にも随分います。皆、悪い事とわかってやっています。私にも、そういう誘いがあります。私は、まだそうなっていないけれど、彼女達の気持ちは理解できます。なかなか勉強できない、お金も儲けられない、そのまま帰国したら悲惨だから、せめてお金を、と考えるのです。ある中国人女性は、自分は好きじゃなくても、日本人の下層労働者と結婚した。でも、下層労働者は、毎日酒を飲むとか、パチンコするとかで、すぐ喧嘩して離婚する。でも、中国人女性は、これで卒業後も日本に居住できる。そうすれば貯金もできる。帰国して、店や貿易など、本当にやりたい仕事もできる。今、お金もないままに中国に帰っても、やりたい事は何もできない。皆、焦っている。とりあえず、お金を儲けてから中国に帰り、何かやりたいと考えている。だから、勉強もあまりできず、お金もたまっていない今は、帰国したくない。日本に残るために、めちゃくちゃな手続きをやっている。悪いと思うけど、仕方がない。例えば、結婚して、離婚して、また結婚してとか。初めから日本人も了解した上で偽装結婚することもあります。お金を払えば、形式上、日

本人と結婚できる。そういう手づるもあります。私も、これから、そうなるのかも知れません」

第3項　中国人就学生

中国人就学生の人生観は、大卒専門職出身者と高卒労働者出身者で異なる。即ちまず大卒専門職出身者は、来日前から、「金銭より趣味・ゆとり」、「家庭生活より仕事」を重視し、また「中国国家・社会の発展に貢献」したいという指向も強かった。つまり自己実現・やりがいとしての仕事を通して、国家・社会に貢献していくという指向性である。これに対し、高卒労働者出身者は、「金銭」と「趣味・ゆとり」、「仕事」と「家庭生活」を重視する者が相半ばし、また「国家・社会への貢献」でも「個人の自己実現」でもなく、身近な人々・友人との共同を重視する指向性が強かった。

こうした就学生の価値志向は、来日後も変わっていない。ただし来日後、徐々に個人主義・金銭重視が強まっているとの指摘もある。

＊「来日して、だんだん皆、人間が変わりますね、昔の友人とだんだん離れ、皆、友人よりお金の方を見るようになる。生活に追われ、しかも貯金して帰国すればすごい金額になる現実の中では、誰でも少しはそうなるんじゃないですか」（大卒専門職出身者）

第4項　韓国人留学生・インドネシア人留学生・マレーシア人就学生

韓国人留学生は、国費も私費も、来日前から、「金銭より趣味・ゆとり」、「家庭生活より仕事」[3)]、そして「個人の自己実現より国・社会への貢献」を重視すべきとの人生観を有していた。つまり、自己実現・やりがいとしての仕事を通して、国家・社会に貢献していくという価値観である。そしてそれは来日後、ますます強くなっている。

＊【趣味・ゆとり優先】

「僕は、小さい時からお金のことはあまり気にしない。基本的な生活さえできればいい。大事なのは、やりたいことをやった精神的な満足。やりたいことができれば、お金は問題じゃない。僕は研究者だから、いくらやってもお金儲けとは関係ない。お金がほしかったら、日本には来ない。韓国で商売している」

【仕事優先】

「来日前から、家族についてはあまり深く考えていなかった。まず自分が社会的に職場で立たなければ、家庭もうまくいかない。それに家庭は個人問題だけど、仕事は皆の問題。男ならやっぱり仕事をちゃんとやらないと。夫が家庭ばかりで、毎日仕事もしないで出世しないで、奥さんは幸せか」

【国家・社会優先】

「自分だけの事を考えるのではなくて、自分のもっているものをすべて発揮して国や社会のために役立っていきたい。今、やっている研究も個人の人生に役立つことではない。国や社会の発展に関係がある。今、韓国は経済的にも社会的にも低い。でも母国だし、留学できたのも国のお陰。自分の勉強を頑張って、国の発展に貢献できたらいい。小さな個人的問題は後回しだ。来日してますますそう思うようになった。日本は発展しているのに、自分の国はどうなっているんだと思う。留学しなければ、ここまで思わなかっただろう。韓国でこんなことわざがある。外国にいけば、すべての人が愛国者になる」

インドネシア人留学生は、来日前から、「金銭より趣味・ゆとり」、「仕事より家庭生活」を重視し、そして「国家・社会への貢献と個人の自己実現」を両立させたいという人生観をもっていた。即ち、基本的には、趣味・ゆとりや家庭生活など仕事以外の面での個人生活を重視しつつ、それと両立しうる範囲で仕事に取り組み、国家・社会へも貢献していこうという指向性である。

＊「お金は必要だが、それより自分でやりたい事をやる方がいい。やりたい事ができてお金がないのは大丈夫。耐えられる。お金はあってもやりたくない事をやっているというのはいやだ。家庭と仕事は、どちらも大切。

55%家庭、45%仕事かな。インドネシアで、友人の奥さんが入院して、友人は仕事を休んで奥さんと病院に行った。そしたらボスが怒った。ボスは、『君ならどうする』と私に聞くので、『私も仕事を休む』と答えた。ボスは怒って行ってしまった。こういう事についての考えは、日本にきてもあまり変わらない。仕事がよくて家庭がめちゃくちゃはよくないし、仕事がうまくいかなければ家庭も難しい。仕事か家庭かではなく、両方うまくやるためにどうするのかという考え方をする。国や社会のためと自分のためも分けられない。社会に貢献すれば、もちろん自分自身のためにもなる。知識や能力は、他人に渡してもなくならない。逆に増える。自分のためだけに使っていると、知識も増えないし、能力も発展しない」

最後にマレーシア人就学生は、来日前、「金銭」と「趣味・ゆとり」、「家庭生活」と「仕事」を重視する者が、それぞれ相半ばしていた。また男性には「国・社会への貢献」を重視する者が多く、女性には「個人の自己実現」を重視する者が多かった。こうした人生観は、来日後も大きな変化はない。

第2節　留学・就学の成果・自己変容

では次に、留学生・就学生が、来日後、自分自身が何を学び、いかに変わったと評価しているかを見よう。彼らの多くは、第5章で詳述した如く、日本社会や母国社会に対する社会認識の変化を、自らの変化として感じている。ここでは、それ以外の自己変容を分析する。

第1項　中国人国費留学生

中国人国費留学生は、ほぼ全員が、留学で得た最も大きな自らの変化として、専門知識の修得を指摘している。

＊「日本は研究面で進んでいて、中国では今、できないこともいろいろ勉強できた。正式に集中的に勉強して、専門分野のより高度な知識を得た。実験のやり方でも基本的な考え方でも、日本と中国では違う。教え方も違う。私達は勉強のためにきているのだから、いろいろ勉強できる環境が一番ありがたいし、これが一番意味がある」（日本政府国費）

「研究面での進歩が一番。留学の目的がこれだから。中国ではできない実験がいろいろできた。中国ではソビエト式の実験で細かい所は気を使わずにどんどん前に進む。日本は細かく厳密にやる。私の専門知識はだいぶ高くなった。満足はしていないけど、満足する結果は留学中には出そうだ。たくさん勉強した。勉強ばかりです」（中国政府国費）

これに次ぎ、日本政府国費留学生では、日本人の友人を得たことを、留学に伴う自らの変化としてあげる者が多い。前述の如く、彼らは、日本人との社会関係が客観的には相対的に希薄で、しかしそれだけに切実に日本人との社会関係の構築を求めていた（第3章第1節参照）。彼らが「友人を得たこと」を自らの変化としてあげるのは、こうした要求の反映ともいえる。

他方、中国政府国費留学生では、異文化理解・視野の拡大、特に人間関係観が日本的に変化して、自己主張より協調・「和」を心掛けるようになったと感じている。彼らは、日本人との人間関係や日本式のマナー等にも無関心だった（第3章第1節・第4章第2節参照）が、それでも来日前と比べれば、こうした自らの変化を感じているのである。

＊「生き方に対する視野が広くなった。今まで自分の考えが当たり前と思っていたが、初めて『こういう考え方もあるんだなー』と感じ、柔軟性を覚えた。例えば、自分の国をものさしにして判断するのではなくて、まず相手を知るべきだと思った。私はずっと学校にいたから、何か考えたらすぐ言ってしまうくせがついて

いた。何でもがんがん言う友達付き合いだった。それが今は違ってきた。慎重になった。人を傷つけるのはよくない。相手を受け入れるような気持ち。今はこれしか話していないけど、本来はもっとポンポンしゃべる。帰ったら、友達に変わったと言われるかも知れない」（中国政府国費）

第２項　中国人私費留学生

中国人私費留学生の自己変容に関する評価は、属性毎に多様である。

まず大学院・大学の私費留学生は、約半数が、専門的知識の習得を自らの変化として指摘している。

＊「日本の研究はレベルが高いから、研究面での進歩はもちろんあった。予想以上にレベルが上がった。設備はいいし、実験用具も中国と比べるとずっといい」（理系大学院生）

「日本での勉強で、中国では習えないことができた。中国より進んだことが学べた。日本にきて初めて、学問というものの門を叩いて入りかけた感じがする。また文法について、『なら』と『と』、敬語、『ので』と『から』など、日本人にとっても難しいということがわかった。これらは日本語・日本文学の研究でも役に立つ」（文系大学院生）

「私は中国では大学に行ってないし、勉強は好きではなかった。でも日本の大学に行って勉強がとてもおもしろい。専門的な知識がだいぶ身についてきた。今まで知らなかったこと、考えたこともなかったものの見方が、だんだんわかってきた」（私立大学生）

それに加え、理系大学院生は視野の拡大を指摘する者が多い。総じて彼らの変化は、国費留学生のそれに近い。

＊「留学する時には、新しい技術・専門を伝えて、中国の科学をもっと先進にしたいとだけ思っていた。今はもっと広い視野で人生や社会のことも伝えたいと思うようになった」

他方、文系大学院生は、中国では経験し得なかった様々な体験、及び、それを通して培った日本人の友人の存在を、留学の大きな成果と受けとめている。

＊「中国での人生を振り返ってみると、ずっとこれまで順調だった。困難はなかった。大学を卒業して、一番人気のある官庁に就職できた。人生の苦しみを体験したことがなかった。でも、日本にきて最低の生活をした。決して順調じゃない。奨学金はないし、アルバイトで疲れたり、本を読んでもわからなかったり。そういう悩みを体験して初めて人生がもっと充実した。大きな困難にあっても対応できるようになり、人間として前より少し大きくなった。苦しい生活の中でも自分なりに明るく楽しくやっている。生きていて、たくさんの事を知って、たくさんの人と知り合ったことは素晴らしいことだ」

私立大学生は、日本での生活経験を通じて培われた自らの自立性や自信、意志の強さ等を、留学で得た大きな要素と受けとめている。

＊「大学の勉強だけでなく、人間的成長が一番。やっぱり日本で生活することで、視野が開拓され、意志が強くなる。粘り強くなる。日本で頑張れたということで、自分に自信がもてる。自分の事は自分ですべて決めなければならないので自立した。祖国の保護の下で育った子供は、独立するのが難しい。温室で育った子供は弱い。私は独立した人間になりたいし、そうなってきたと思う。いつも笑って性格を明るくする。性格が暗くなったら、外国ではすべて終わりだ」

そして専門学校生は、アルバイトを含む実社会の経験の中で、仕事に対する姿勢、勤勉さ、市場感覚やファッション・センス等、将来の具体的な職業展望に連なる多様な能力・資質の形成を、留学の最大の成果と評価している。学校で学んだ知識も、それとの関係で位置づけている[4)]。

＊「日本にきてファッションのセンスを養いました。私達中国人は自分の好きなものを作ります。日本人の学生は売れるものを作ります。そのために、何が流行しているか、世界のファッションの動向をよく見ています。私達は、先生にいつも『これではだめです』と言われます。開放が不十分なのです。将来、ファッションの仕事をしようと思ったのは来日してからです。理由は、人の役に立つし、ミシンさえあれば、どこにいってもできる。それに服がどんなに儲かるかわかりました。1万円で売っている服も、自分で作ったら2000円もかからない。だからいいと思いました」（ファッション専門学校）

「来日前は、自分が何をやりたいとか、何ができるとか、あまり考えなかった。日本にきて、たくさんの人と知り合って、自分も何かやる方がいいと思い始めた。他の人を見て、貿易をやりたいと考えるようになった。日本での生活体験は貿易の仕事に役立つと思う。日本人と付き合って、どういう生活習慣かだいたいわかるし、日本にどんなものがあるかもわかる。日本人の商売の方法、考え方もわかってくる。言葉もわかるようになる。貿易をすれば、これらは全部役立つ」（ビジネス英語専門学校）

第3項　中国人・マレーシア人就学生

中国人・マレーシア人の就学生は、来日後、日が浅いため、まだ留学の成果として明確に感じる自己変容は少ない。ただ彼らの多くは、自ら「勤勉になった」と感じ、また「仕事の能率」・「仕事に対する責任感」・「経済発展の知見」等、総じてアルバイト労働を通した認識の変化を感じている。

第4項　韓国人留学生

韓国人留学生が日本留学を通して得たものは、極めて多岐にわたる。

まずその最大の要素は、専門知識の獲得・専門研究の深化である。

＊「韓国ではできない先進研究に触れることができて、自分の考えが発達した。それが一番大きい。いろんな人がそれについて研究するような世界的論文を書きたい。一生、この姿勢はもっていきたい。韓国では、私の分野の研究者があまりいない。文献もあまり多くない。日本では、実験もできる。設備もある。研究費もすごくいい。日本で研究したものは、韓国ではとても意義がある」

また彼らは、視野の拡大、自信・自立性等の点でも、自らが大きく変わったと感じている。

＊「日本にきて、いろんな刺激にあって新しい視点が得られた。視野が広くなった。積極的に意欲的に何でもするようになった。先進国の人がそうやっているということが実際にわかった。こういう面は、帰ってからも生かしたい。それに、家を離れて全然違うところで生活した経験で、どんな状況でもできるんだという自信と、いい悪いを判断する視点を学んだ。一人暮らしは初めてだったから、今まで生活人という意識はなかったが、自分がちゃんと生活するという意味がわかった。例えば今日はいくらで生活するとか、一日の設計を全部自分でやる。いくらでもつらいことがある。いろいろなつらいことをどう解決するかということを学んだ。両親とか家族の有り難さがつくづくわかった」

さらに彼らは、異文化理解、特に人間関係観に変化があり、「日本人的」になったと感じている。また特に国費留学生は、日本人の友人を得たことを大きな変化と受けとめている（第3章第1節参照）。ただし、「日本人的」な人間関係観への変化の内容は、「自己主張より和を重視するようになった」もあれば、逆に「個人主義的になった」もあるなど多様で、しかもそうした変化に対しては、肯定的・否定的な評価が相半ばしている。

＊「来日前より、気を使い、周りを考えるようになった。個人より協力関係を大事にして、自分の考えを相手に合わせるようになった。自己主張ではなく、話し合いで問題を解決する。以前は、どんな事でも自分の考えは曲げたくない、自分の根性が大事と思っていた。だけど、人に対する優しさというか、人と話し合うこ

とが増えた。自分とは違う見方をする人の意見も聞けるようになった。ものの考え方は一つだけじゃない、だから自分と違うものについてもオープンな考え、精神的な余裕が必要だとわかった」

「来日直後の自分と、今の自分の意識はちょっと変わった。日本で１人で生活してきたから、自分の事は自分でやるという考えになってきている。誰も見てくれない。個人主義的になったと私自身感じる。私の性格も考え方も、ずっと一つの方向に固まってしまって、他人を理解しようという気持ちが弱くなった。気に入らない事があっても、個人的に解決しようとしてしまう。友達と一緒に解決しようとすると、精神的に疲れる。来日直後はそんな事は感じなかったのだが。何か日本人的に適応してしまっている気がする」

「日本にきて、人間関係の違いを経験して、何か半端になったような気がする。ここで長く住んでいる人を見ると、こっちのやり方に慣れて、自分の国のことを忘れてしまっている。本音を言わなくなったり、個人主義になったり。留学は、自分に合わせていろいろ学ばなければならないのに、それが逆に合わせてしまっている。異文化との接触は、あくまで自分の国の文化を考える機会なのだから。こっちに合わせてしまっては意味がない。だから、１～２年の留学はいいが、長期的には勧めない」

第５項　インドネシア人留学生

インドネシア人留学生が日本での留学生活を通して得た最大の変化は、イスラムの再認識という形での異文化理解・異文化体験である。

＊「日本にきて、イスラムに則ってやっていく大切さを改めて感じた。我々は、コーランによって、『way of life』をなるべく守っている。日本人が知らなくてやっていることでも、コーランに則っている事がある。約束や時間を守るとかはコーランに書いてある。またイスラムでは、一つの国のためではなく、人類のため、心のために働く。前は、イスラムにあまりまじめじゃなかった。日本にきてから、前よりも大切に思うようになった。例えば、インドネシアには悪い番組はない。日本にきてから、イスラムで禁止されているものが、本当に悪い番組だとわかった。日本にきて、いろんな誘惑を経験しながら、自分の力で生活してきた。だから、いいものを手に入れたい、そのためにイスラムが大事だと思うようになった」

またそれ以外に彼らは、①規律正しさ・時間厳守、②高度な専門知識、③自立・自信等の面で自己変容を指摘し、それらをいずれも肯定的に評価している。

＊「効率や一生懸命やることを日本で学んだ。時間の使い方。それをインドネシアに帰ってから実践したい。それと日本人はすごく規則を守るから、向こうで自分が率先してそうしたい。約束は必ず守るとか、正直とか。多分、僕はインドネシアに帰ると、夜の９時まで頑張ってしまうだろう。雇主のために効率的に時間厳守で働くだろう。それがいいことだと思うようになった。それと専門知識が増えたことは有意義だ。日本の研究は進んでいるし、専門家も多い。レベルの高い専門家のもとで、直接勉強できるのはいい。学んだことの意義は大きい」

「私は生まれてから日本にくるまで、親から離れたことがなかった。初めて親から離れて一人でも生活できるなと感じた。親に頼らないようにしようと思った。自分で物事を決める。自分で何事もやる。そういう意味で大人になる。いろんな問題が出てきて、全部一人でやらなければならないから、経験が増えた」

第３節　将来指向

最後に、留学生・就学生の将来指向を見る。

第１項　中国人国費留学生

さて、中国人国費留学生は、博士取得後、帰国し、大学や研究所に研究・教育職で就職することを

希望している。彼らは、研究・教育を通して、今後も日中の「橋渡し」をしたいと望んでいる。日本の習慣や社会を紹介したいと思っている者も多いが、やはり研究・教育面での交流が中心である。

＊「元の研究所に戻り、研究を続ける。ポストはある。帰ったら、中国でも高度な研究ができるようにしたい。よく日本の先生が講演会とかで来るが、向こうには日本語のちゃんとした専門的な通訳ができる人が少ないので、その面でも自分の力を役立てたい。僕の知っている日本のえらい先生を講演に招き、研究交流したい。同じ研究室の後輩に日本語を教え、こっちに送って勉強させたい。自分も時々きて勉強したい。中国と日本の科学技術の交流、人の間の理解の促進。何か勉強しようとしている人のために、両国の間を近づけられるような役割をしたい」（日本政府国費）

「ドクターが終わったらすぐ帰国して大学の先生になる。就職先は政府が用意している。中国は学位重視だから、学位さえ取れれば大丈夫。それに中国ではまだ留学生は少ないから、留学した人を大事にしている。帰国後も、共同研究・学術交流で中日の橋渡しをする。日本の専門家や技術を紹介し、論文を翻訳する」（中国政府国費）

ただし、日本政府国費留学生の一部は、帰国に様々な葛藤を抱いている。彼らは、アメリカ等での留学継続、または日本企業での就職を強く望んでいる。

＊「将来はまだわからない。表面的には、学位を取って帰って、大学の教師になる。そういう事は、中国ではまだ珍しい。でも、人生のことはもっと大事。チャンスがあれば、英語を話す国で勉強したい。日本にきてから、自分の国や生活を反省して、将来に対するいろんな考え方が出てくる。国費留学生なので、中国に帰って、国家に貢献するのは義務でしょうと言う人もいる。でも私は、国家・政府の一員ではなく、独立の人間でありたい。自分の選択でやりたいことをやる。中国は本当は自分の国だから、皆、帰りたがっている。中国以外の国はやっぱり母国ではない。留学ならいいが、ずっと過ごすとすれば中国。よその国に移住したら、中国人は人口も多いし、受入国も困るでしょう。でも、今の中国には自由がないし、研究もやりにくい。帰りたいとは思わない。多くの中国人がこの悩みをもっている。人間である以上、自分がやりたいことをもっているだろう。でも、中国に帰るということは、それを諦めることかも知れない。中国には帰りたいが、今はやはり帰りたくない。留学前の職場はやめたわけではないが、多分やめることになるだろう」（本事例は、実際には博士修了後、アメリカに留学した）

「将来は迷っている。博士をとって帰国したら、研究所の部長クラスのポストにはつける。先輩がそこの所長をしていて、来たいなら来いと言ってくれている。でも、中国ではやりたい事ができない。研究の予算も施設もないし、何か新しいことをやろうと提案しても、許可がおりるまですごく時間がかかる。ただむだに時間をつぶす。だから帰りたくない。できればアメリカに留学するか、日本の会社で働きたい。日本でオーバーステイで単純労働しても、それでもすぐに中国に帰るより、ましという気持ちもある。一時帰国した時、中国の知人や友人に将来の事を相談したが、殆どの人は、帰国するよりとにかく日本に残った方が絶対にいいとアドバイスした。その中には留学経験者もいるが、すぐに帰国したことを後悔していた」（本事例は、実際には、博士取得後、数カ月間、単純労働のアルバイトをした後、日本の中小企業に技術者として就職した）

また中国政府国費を含め、国費留学生のこうした葛藤を、ある私費留学生も次のように語る。

＊「国費留学生は、『祖国に貢献』といいながら、実際には、奨学金等で国に縛られている人も多い。『国の跡継ぎ』と言われ、期待され、帰国したら順調なコースに乗れるように見えるが、好きな研究もできず、我慢して甘んじなければならない人も多い。だから、国費の中には、いったん帰国して、すぐに別の名目で日本や他の国に、今度は私費で出国する人もいる。国の縛りを逃れて、再来日する人もいる。恵まれているように見えるが、ある意味では彼らも悩んでいる。かわいそうだ」

第２項　中国人私費留学生

中国人私費留学生は、多くの場合、当面の留学期間終了後の進路が未定である。彼らはいくつかの進路選択の狭間で葛藤の渦中にある。

まず理系大学院生は、博士取得後、最終的には帰国し、研究・教育職に就きたいと考えている。ただし彼らの多くは、帰国する前に、短期間、ＰＤＦ（Post Doctorul Fellowship）等での留学継続を望んでいる。またその際、日本はＰＤＦ制度が充実していないため、アメリカ等に行くことを希望する者が多い。彼らは、将来的には、研究面で中日の「橋渡し」をしたいと考えている。

＊「多分、博士を取った後、国に帰るだろう。でもできれば、ＰＤＦの研究員をやってもっと勉強してから、国に帰りたい。日本ではＰＤＦが殆どないから、アメリカかカナダ。私の研究は、今、国に帰っても満足できない。新鮮なことをもっと勉強したい。中国での仕事は決まっていないが、多分、大学か研究所、研究の方ですね。最後は中国に帰る。私の専門の方で、もっと中日の研究者や学者・学生の学術交流をしたい」

これに対し、文系大学院生の場合、帰国して研究・教育職に就くことも確かに一つの選択肢ではある。しかし彼らは、できれば日本で就職するか、それが難しければ、アメリカ等での留学継続を強く望んでいる。また彼らは帰国した場合も含め、研究・教育職以外に、経済・文化に関わる多様な職業に就くことを想定している。それとも関わり、日本では文系では博士取得が難しく、また博士課程に進学すると却って就職が限定されるため、修士課程までにした方がよいと考える者も少なくない。彼らは、中日の「橋渡し」・相互理解促進の担い手になることを、研究・経済・文化・社会等、多様な面で幅広く、しかしそれだけに曖昧に希望している。

＊「ドクター進学も考えているが、できればマスター修了後、日本の会社に就職したい。その経験を生かして、将来、もしできれば中国で大学を作りたい。今、中国でも私立大学ができてきている。でも今は中国の将来が見通しにくく、情報もわかりにくい。私は、経済や文化面での確実な交流をもっと強くしたい。中日どちらにも互いの認識・理解不足があるから、この目で見た、体験した事をありのままに、いい所も悪い所も伝えたい」（本事例は、マスター修了後、日本の教育産業企業に中国進出の担当者として就職した。しかしそこに勤め続けるつもりは今のところなく、大学創設の夢は捨てていない）

「一応、希望は帰国して大学教員に戻り、中日往復することだが、中国の事情がわからないから迷っている。友達はドクターをもっていても仕事がないというが、人民日報には大歓迎と書いてある。どっちが本当か。自分の希望する所に入れるのかどうか。中国は母国だし、大好きだし、いい先生になりたいと思うけど、今の中国で大学教員になっても、やっぱり自由がないと苦しい。悩んでいる。夢としては他の国にも行きたい。アメリカで英語と民主主義的なものを勉強したい。日本で就職があればいいが、まだ何とも言えない。どういう道を歩くとしても、中国の人に日本のことを知ってもらい、日本の人に中国のことを知ってもらう。普通の人間として一人の中国人として、そういう架橋になりたい」（本事例は、ドクター修了後、日本の大学に中国語教師として就職した）

「日中どちらかの大学の先生にもなりたいし、通訳・翻訳の仕事もしたい。できれば日本で就職したいし、日本に永住して結婚もしたい。できるだけ中国には帰りたくない。帰るのはいつでも帰れる。その前に、今しかできない事をやりたい。世界はどこでも私の仕事場。でも、それが無理なら、中国の日系企業で働くか、中日の貿易もしてみたい。もし大学院に入れなかったら、貿易会社に行くかなーと思っていたが、大学院に入ったから、ビジネスより、文化・教育のような仕事がいいかなーと思っている。特に意識はしないけど、私がこれからやることは、すべて中日の橋渡しになると思う」（本事例は、修士修了後、日本人と結婚し、日本で翻訳・通訳の仕事をしている）

そして大学院、とりわけ文系大学院の私費留学生にとって、帰国して就職する以外の道は、必ずし

も容易ではない。またたとえ日本やアメリカで進学・就職できたとしても、常に「その先はどうするのか」という不安定さがつきまとう。彼らの平均年齢は既に30歳で、さしあたりの留学期間が終わる頃には40歳代になる者もいる。そこで彼らの一部は、将来に強い不安・焦燥を感じている。また彼らには既婚で子供がいるケースも少なくない。特に日本での就職を希望する場合、民族差別・言語・教育を含め、子供の将来に不安を感じる者もいる。

＊「私費留学生には高齢化の問題がある。もう40歳代の人もいる。そういう人は、本来、社会で何らかの活躍・貢献ができる能力がある人だし、そうしているはずの年齢だ。それなのに、まだ学生をしている。自分はこんな年齢なのに、何も社会に貢献していない、まだ本当に独り立ちしていないという焦り、ストレスがある。特に男性には、それで悩む人が多い。方向が定まらないまま、人生の半分以上が過ぎてしまった、自分の人生は何だったのだろう、でもどうしようもない。こういうストレスは、普段は忘れていても、ふとした時に出てくる。そういう事が背景にあってイライラして、留学生同士の夫婦関係がうまくいかなくなることもある」

「私は日本で就職したいし、妻もそれを望んでいる。でも、ずっと日本にいるかどうかはわからない。それは、子供のことがあるから。私達夫婦は、自分達の意志で、好きで日本にきた。でも子供は、大きくなった時、日本で中国人として生きて行くことを、よかったと思うだろうか。もちろん、日本にいることは子供にとっていい事もある。日本語と中国語と両方できるようになるし、いろんな方面で日本は中国よりいい。そういう事がうまく生かせれば、子供は日本にいてよかったと思うだろう。でも、日本で『外国人』として生きて行く事が、子供にとってマイナスになれば、かわいそうだ。例えば、子供が差別されないか不安です。子供にはみじめな思いをさせたらまずい。子供には、中国と日本の２つの国の文化の経験があるのだから、一番豊かではないかとお説教している。でもそれは大人からの見方であって、子供がどう感じているかはわからない。今まで子供はいじめられなかったけど、日本の学校ではいじめとか登校拒否とかあるから心配です。中国なら、帰国子女とか違う経験をしている人は大切にされる。でも日本では、人と違うことがいじめの対象になる。将来、『なぜ日本なんかに来たんだ』と言われるとまずい。これから、日本や中国の社会がどう変わるかもわからないし。こういうことは、いくら考えても仕方ないのだけど、やっぱり少し気になりますね」

さて、私立大学生は、①帰国して研究・教育職以外の職業に就職、②日本の大学院に進学、③日本で就職、そして④他国や香港に留学・就職という４つの選択肢の中で迷い、学年があがるに伴って、そのいずれかに収斂している。ただ、やはり母国で就職という進路以外には、かなりの困難が予想される。なお彼らは、中日の「橋渡し」という形では、自らの役割は考えていない。むしろ国家や民族と無関係な個人の立場で、自らの将来展望に関心を集中させている。

＊「将来は、日本かアメリカの大学院で法律を勉強したい。アメリカやカナダで英語を勉強したい気持ちもある。でも、そういう夢を実現するためにはまず貯金しなければならないので、日本で、今、就職活動をしている。10月、今までアルバイトをしていた旅行会社から内定をもらったが、卒業直前の２月になってだめになった。『本当に大丈夫ですか』と何回も確認して、『大丈夫』と言われていたのに。他にも２つの会社から内定をもらっていたが、既にこちらから断ってしまっていた。これはひどいと思う。一度、採用内定を出しておいて、それで年があけてから、突然、再試験しますと言われ、簡単な計算等やらされて、『採用できません』と通知がきた。ばかにしている。私は、そんな計算ぐらいできる。アルバイトしていた会社だから、仕事もちゃんとできる。支店長も職場の人もそれは知っている。でも、正社員を採用するのは本社で、支店ではない。支店の人達はいろいろ推薦してくれたが、どうしようもなかった。こんな時期に内定取り消しなんて、日本人の学生には絶対やらないでしょう。どうせあと数カ月しか日本の滞在期間がないんだ、中国に帰るしかないんだと思っているから、こんなことも平気でするのでしょう。でも私は負けない。最後まで努

力します」（彼女は、その後、日本の観光ホテルに就職を決め、さらにその後、日本人と結婚、日本国籍取得を申請している）

「将来は、帰国してから考える。希望としては中国で日本語を使う貿易か何かの仕事をしたい。日本で就職できればいいけど、難しいから」（彼女はこう語っていたが、その直後、実際には配偶者とともにアメリカ渡り、英語学校に入った。またアメリカで出産した。しかしアメリカでの大学進学はうまくいかず、中国に帰国した。その後、子供を中国の両親に預け、私費で研究生として再来日、大学院入学を果たした）

「まだ卒業後はよくわからないが、幾つか考えている。一つは日本で大学院進学。来てすぐは、怖いもの知らずで大学院に行こうと思っていた。その後、日本のことや自分の能力もだんだんわかって、大学院なんてとても無理と思った。でも最近、専門の勉強がとてもおもしろいし、成績も割といいので、大学院に行きたい気持ちが、また出てきた。二つ目は、日本で就職。でも、今のアルバイトは中国と関係ないので、もし日本で就職するなら、これから本気で探さなければ。三つ目は、日本で結婚。いい人と出会えれば。大学の学生は若い人ばかりだし、アルバイト先は既婚のおじさんばかり。いい人と会うのは難しい。日本人なら誰でもいいという感じで結婚した人も知っているが、その人は、その後、耐えられなくて逃げて隠れて大変だ。やっぱり相手はよく選ばないと。四つ目は、中国に帰って幼稚園を経営する。私は、以前、幼稚園で働いていた。その経験が生かせるし、中国には教育内容のいい幼稚園がまだ少ない。一人っ子政策で、皆、子供にお金をかけるから、いい幼稚園を作れば絶対にうまくいく」（彼女は今も在学中である）

「もう１年研究生をやって帰国する。１年では日本語は達者にならないから、もう１年だけ勉強する。それに外国に２年以上いたら、中国の政策で香港で仕事を探せる。それは、去年、人民日報に出ていたと友人から聞いた。97年に香港は中国に返還されるが、その後50年間は資本主義が続き、自由に往来できないそうだ。私は、中国で服装会社の人事部長だったが、２年間日本で勉強して帰ると、その会社に戻れる。その会社は香港と合弁している。それに妻は旅行会社の香港・台湾部のガイドだから英語がうまい。そういう事情を考えると、私は、あと１年で帰国し、香港に行くのが一番いいと思う。先生は大学院に行きなさいと言うが、私は、日本語が難しいし、学費も高いし、試験も難しいと思っている。また大学院に入ると２～３年かかる。そうすると、妻も会社も困る。自分もあまり日本に長くいたくない」（彼は、半年後、妻が離婚を求めてきたため、予定を変更して急遽帰国した。その後、中国で妻と離婚、会社も辞めた。そして別の会社で主に日本人の駐在員が利用するゴルフ場に勤務している）

専門学校生の将来指向には、２つのタイプが相半ばしている。

一つは、卒業後、帰国して貿易・自営・翻訳等の就職を望むタイプである。

＊「卒業したら、もう中国に帰りたい。日本は生活も仕事もきついから。妻（就学生）も、あまり日本の習慣に慣れないから、日本語学校の期間が終わったら帰国する。私はその後１年、１人で日本に残ることになる。だからもう早く帰国したいよ。帰国したら、ファッションの仕事をやる。今、中国は開放中だから、背広とかアパレルとか自分の店を夫婦で開店したい。それと元の職場にも、できるだけ早く戻りたい。元の会社に勤めながら、服装の店も経営する。元の職場は３年間だったら休職になるが、４年だったら戻れるかどうかわからない。この事は、本当に恐れている」（彼は、希望通り、元の職場に戻り、副業として服装製造販売の自営業を開設した）

「帰国したい。その方が活躍できるから。貿易ビジネスの仕事をしたい。学んだ事（ビジネス英語の専門学校）は仕事に合うし、役立つ。それに日本語がうまければ、日本と交渉できる。言葉が一番大切だ。そして日本人の習慣や考え方もわかるから、こういう人間と人間の付き合いは、貿易に役立つと思う。できれば１年位、日本の貿易会社で働き、体験勉強したいが、難しいだろう」（彼は、帰国後、元の職場である貿易企業の通訳・翻訳の仕事に戻った。また自分の会社設立の準備を進めている）

「帰国して、小さくても自分の会社を作り、日本との貿易をしたい。または、日本語も英語も勉強している

から、中国の日系企業かな。でも本当にもっと好きなのは、小さい図書館を経営して、本が好きな人にコーヒーを出して、本を読めるような店を静かにやりたい。そして私は、童話等を翻訳する。中国の子供達は、読む本が少なくてかわいそうだ。私達も文革で苦労したから、子供達を助けてあげたい。自分でも童話が書ければ、書きたい。その時、日本でのつらい生活経験が役立つでしょう。それと私は、辞書を作りたい。中国の辞書には、動詞とか名詞とか書いていないことが多い。それが書いてあれば覚えやすくなる。私の父は学者で、そういう仕事をしている。私もそれを手伝い、小さくてもいいからこういう辞書を作りたい。ただ、図書館や童話は、お金を稼ぐ仕事にはならないでしょう。趣味としてやりたい。中国に帰ることには迷いもある。でも、自分の国だから帰りたい」（彼女は帰国し、日系企業で通訳・翻訳の仕事に就いている）

そしてもう一つは、中国への帰国をできる限り忌避し、日本や他国での留学継続を望むタイプである。彼らの多くは、たとえ帰国するとしても、日本や他国（香港を含む）の永住権を取り、いつでも再出国できる条件を整えた上で、帰国したいと考えている。

ただし、こうした帰国忌避型の留学継続指向者にも、2つのタイプがある。

即ち第1は、高度な専門性をもち、あるいは家族が既に他国に定住していて、他国への合法的定住が比較的容易な少数のタイプである。彼らが最終的に定住を予定している国・地域は、カナダ・香港・オーストラリア等、日本以外である。彼らの留学継続の目的は、より高度な専門知識の修得という要素が大きい。

＊「カナダに行きたい。私の本当の専門はチェロの演奏だから、これをやりたい。日本は、流行音楽の方がよくて、チェロの技術が低く、交響楽はだめ。流行音楽の寿命は限りがある。長い視野で考えたら、世界のレベルにならないとだめだから、カナダの方がいい。私にはチェロがあるので、どこに行っても音楽学校に入れる。カナダは奨学金もあるし、演奏の機会も多いので、生活は大丈夫。来日後、あまりチェロの練習はしていないが、不安はない」（彼は、その後、実際にカナダに留学した）

「建築関係の大学に進学したい。もしだめなら、香港に行き、義父（本人は香港の伯母夫婦の養子になっている）の建築会社に入る。今の学校（インテリア専門学校）の勉強は、必ず役立つはず。将来は、イギリスにも留学したい。香港はイギリスとの関係が強いから。でも、今、あれこれ考えると、今の勉強が進まないしょ。イギリス・日本・中国に関する仕事ができればいい」（彼女は、その後、香港の義父の会社に入社した）

「国際金融の大学院に進学したい。それは、日本でもオーストラリアでもいい。99年までに、家族全員、オーストラリアに移民して国籍を取るつもり（現在、両親はマカオ籍、姉はオーストラリア国籍、本人は中国籍）。将来は国際金融の仕事を探したい。世界の言葉は英語と中国語。それに今、アジアでは日本が技術が一番強いから、日本語も大事。英語は中国で勉強した。こういう言葉は、これから何をやるにしても役立つと思う」

第2は、そうした条件をもちあわせない大多数のタイプである。彼らは、大学院や大学の私費留学生とは異なり、日本で正式に就職することは、最初から無理と判断している。そこで中国への帰国を忌避するためには、できるだけ定住権取得が容易な国に移動するか、あるいは日本に残る場合は大学等に進学しなければならない。そしてそれらがいずれも困難な場合、彼らには、超過滞在の道しかない。いずれにせよ彼らにとって留学継続は、もちろん将来を睨んだ専門知識の修得という側面もあるが、それ以上に、帰国を延ばし、できれば他国の永住権を取るための手段と位置づけられている。

＊「どこか中国以外の国に定住したい。どこでもいいから、国籍を取りたい。やっぱり自由のために。一度帰国してしまったら、なかなか出国できない。だからどうしても帰国せずにいたい。国籍さえとれば、中国に帰っても、自由に再出国できる。もし日本が受け入れてくれれば日本に定住するが、無理だろう。来年は、とりあえずオーストリアにドイツ語留学に行くつもり。オーストリアは定住権が取りやすい。友人はオース

トリアで定住権を取った。それがだめなら、アメリカでグリーンカードを取りたい。アメリカは3～5年住んで、その間、出国しなければグリーンカードがもらえ、定住できるそうだ。私にとって、外国に永住できるかどうかは、お金だけ、生活だけが問題だ。お金さえあれば、永住できる国はある。外国にいる友達から、いろいろ情報を集めている。そういう専門の組織もある。仕事は、別に、服装や自動車を考えているわけではない（彼は、中国では自動車技師であり、日本ではファッションの専門学校生である）。本当は自動車の仕事がやりたいが、そういうチャンスはない。単純労働は覚悟している」（彼は、その後、深夜、アルバイトからの帰宅途上で交通事故死した）

「このまま勉強もお金もうまくいかなければ、私も、不法滞在とか偽装結婚とか、そういうふうになるのかも知れません。でも、できるだけそういうことにはなりたくない。できれば、カナダかオーストラリアに行きたい。日本に合法的に残るのは難しいし、日本にはやっぱり人種差別があるから。外国に行くためにも、日本でお金をたくさん稼ぎたい。それに私は、中国で大学を出ているから、英語を勉強したい気もある。お金がないとそれもなかなかできない。もちろん自由と民主があって、帰って好きなことができるなら、すぐに帰国してもかまいません。でも今はちょっと無理。中国に帰るのはいつでも帰れる。技術とお金をたくさん身につけてから、自由になって中国に帰りたい。将来は、中国でファッションの会社を作りたい。お金さえあれば、中国に帰ったら、あちこちいい所を回って、夏は涼しい所、冬は暖かい所で生活できる」（彼女は超過滞在でホステスの仕事をしばらく続けた。その後は不明である）

「専門学校を卒業したら、大学に進学したい。それがだめなら、帰国して貿易会社を作って、日本と中国の貿易をやりたい。でも、今、帰国しても自由に自分のやりたい仕事はできないから、5年後、もし中国が変わったら、帰国したい。今は帰りたくない。できれば日本で永住権をとって働きたいが、だめだろう。それがだめなら、一定期間、日本で（超過滞在で）働く」（彼は、その後、超過滞在で木材関係の企業で就労した）

第3項　中国人就学生

さて、中国人就学生の多くは、現在の日本語学校修了後、日本の大学・大学院に進学し、その後、日本か中国のいずれかで就職することを望んでいる。彼らのうち、大卒専門職出身者は、大学院や大学に進学し、その後、帰国して元の職場に戻ることを望む者が多い。他方、高卒労働者出身者は、大学卒業後、日本か中国のいずれかで、貿易に従事するか、自営業を開設したいと考えている者が多い。なお大卒・高卒の違いを問わず、男性は、留学修了後、数年間、日本の企業で働きたいと考えている[5)]。

＊「建築関係の大学院か大学に進学したい。大学か大学院を卒業したら、1～3年間、日本で働きたい。言葉だけの勉強では空洞。企業で実際の経験を豊富にすれば、帰国してからより一層、服務できる。将来は、中国で建築関連の職場に戻り、国際交流部門に勤めたい。先進のものを遅れたものに取り替えたい」（大卒専門職出身・男性）

「社会学・新聞学・言語表現の大学院に入りたい。私は、放送・音像の仕事、出版・マスコミの仕事が大好きだから、その技術・仕事について学びたい。それでもう一度、この仕事をやりたい。帰国すれば、その職場に戻れる予定。今後、中日両国のマスコミの友誼・交流がもっと増えるだろう。中国と日本の文化関係の放送・出版など、コミュニケーションについての共同の仕事をしたい。日本での勉強・体験は、将来、きっと役に立つ。だから日本での生活も我慢することができる」（大卒専門職出身・女性）

「大学に入って経済を勉強する。大学を卒業したら、5～6年、日本で働きたい。日本の会社がどんなふうに働いているのか、管理とか知りたい。貯金もしたい。将来は、中国で自分で貿易会社を作りたい。大学の勉強は、そのために役立つと思う。来日後、日本の経済を見て、こう考えるようになった。中国で会社をつくるのはいろいろ難しい。でも中国人は中国にいる方がいい。何をやるにも便利だから。でも日本の方が便

利なら、日本で会社を作りたい」（高卒労働者出身・男性）

「日本で貿易経営したい。来日前は、将来のことはあまり考えなかったが、日本にきて少し自由を感じた。そして中日貿易が盛んなので、そう考えた。早く日本語がうまくなって、日本の習俗に慣れて、日本に勤めたい。何年間でもいい。そういう経験を集めれば、帰国しても役に立つ。最後は中国に帰りたい。中国人だから、やっぱり中国の方が好きです。ただこれは、現在の考え方ですが」（高卒労働者出身・女性）

ただし、就学生の中には、来日後、アルバイトと勉強の両立の困難さを知り、日本での進学を断念した者もいる。また専門学校生の中には、自らが就学生だった頃、主要には日本語学校の質の悪さが主な原因で、進学を断念したり、超過滞在にならざるを得なかった仲間が多数いたことを指摘する者もいる。

＊「日本にきて、初めは進学したいなと思っていたが、来日後、生活と勉強の両立がきついと思うようになった。来る前は、自立してバイトして大丈夫だと思っていたが、全然違う。現実に基づき、進学できなくてもいいかなーと思うようになった。夫婦で来ているから、夫婦が一緒に勉強して働いては厳しい。洗濯や家事もあるし、どちらかが勉強できなくなる。両方が勉強すれば、両方めちゃくちゃになる」（大卒専門職出身・女性）

「私の日本語学校はひどかった。まともに授業もない。だから、殆どの学生は皆、進学などとてもできない。大部分の学生は、最初は進学したいと思っていたが、後期になると無理だとわかってくる。学校に対して怒る。それで、もう後期には授業料も払わず、不法滞在でお金を稼ぐだけになる。私の友人の中にも、そういう人がたくさんいる。彼らは、稼げるだけ稼いで中国に帰り、高級な食堂等の自営業をやろうと思っている。私も、そうなってもおかしくなかった。まわりは、皆、そうなのだから。コネのある人は、私立大学の研究生になれる。金さえ払えば、研究生になれるという情報もあった。金は、大学の先生が取るのか、紹介する中国人が取るのか知らないが。私が専門学校に行くといったら、皆、そんなばからしいことはやめろと言った。専門学校は、昼間は全部授業で出席も厳しいから、アルバイトが制限される。授業料も高い。私は、将来、服装の店をやる希望と条件があったから、ファッションの専門学校に行ったが、もしそうでなければ、不法滞在で稼げるだけ稼ぐ方がずっといい。そう考えるのは当たり前だ」

第4項　韓国人留学生・インドネシア人留学生・マレーシア人就学生

韓国人留学生は、国費・私費を問わず、博士取得後、帰国して研究・教育職に就くことを希望している[6]。彼らは、帰国後、研究・教育を通して、またそれだけでなく、日本社会の実情を紹介し、母国に根深く存在する日本への「誤解」を解消することを通して、韓日の「橋渡し」になりたいと考えている。

＊「ドクターを終えたら、帰国して研究所か大学に就職する。希望としては教授になりたい。日本の研究者と交流を続ける。先生や友達の紹介。それと、日本で感じたことを、悪い面よりはいい面を向こうの学生達に伝えたい。日本に対して歴史的なことで悪い感情をもっている人が多いから、いい面を強調して伝えたい。希望する人がいれば、周りの人々に日本の文化や日本語を教えたい」（国費）

「ドクターが終わったら、韓国の大学に入り、生徒に教えるつもり。国でも研究をずっと続けたい。同じ研究分野の人と共同研究とか、交流できるんじゃないか。大学の先生になったら、学生に日本の現状・実情をよく知らせる。日本で経験したことのないまわりの人に対して、日本の経験を伝えたい。学問の差など学ぶ事が多いこと、日本に対して間違った理解をしているということを、皆に話したい」（私費）

インドネシア人留学生のうち、大学院生は、博士取得後、帰国し、研究・技術者になりたいと考えている。他方、大学生は、母国で就職、日本で就職や進学、他国に留学等、多様な選択肢を模索して

いる。いずれにせよインドネシア人留学生は、仕事以外に、観光ガイドや社会の紹介を含め、多様な形で母国と日本の「橋渡し」になりたいと考えている。なおインドネシア政府国費留学生には、帰国後、公務員になることが義務づけられているケースもある。

＊「インドネシアの大学に戻って先生になる。私が勉強しているのは水のことだけど、インドネシアでは雨季と乾季がはっきりしている。こういう環境で１年中水を集めるにはどうしたらいいか。ダムはどこに作り、森林をどのくらい残すとか、ダムは大きなものばかりじゃなくて、小さなものも作るべきとか、コンクリートは高価なので木で作れないかとか。そういう研究。インドネシアに帰ったら、私が学んだ事を教えてあげたい。日本のエキスパートになり、ＪＩＣＡから来る人達と一緒に共同研究したい。研究を通して、日本と交流したい。もし日本人がボルネオに来たら、今、親切にしてもらっているから、何かやってあげたい。観光のお手伝いなど」（大学院生）

「まだわからないが、日本の大学院に行きたければ行かせてもらえる。大学院に行って大学の先生になるか、それとも２～３年日本の会社に勤めて社会勉強してインドネシアに帰るか。インドネシアでは仕事を探すのが大変だから、日本の会社に勤めて帰れば、経験が役立つと思う。インドネシアと日本のいい点を紹介したい。情報交換とか、友達として助け合う。観光地等を案内する」（大学生）

「僕はインドネシア政府国費だから、後で国の統計局に勤めなければならない。留学するなら、役人にならなければならない。もし勉強を続けるチャンスがあればしたい。日本でもどこでもいい」（大学生）

最後に、マレーシア人就学生は、全員、日本での大学進学を希望している。そして大学卒業後、一定期間、日本企業で経験を積み、最終的にはマレーシアに帰国して自営・経営をしたいと考えている。

＊「私の目標は、日本でいい大学に入ってから、国に帰る。そして旅行のホテルの事業を発展させたい。日本企業でも働き、資金を作り、経験ももらいたい」（男性）

「有名大学に入る。機会があれば、日本企業で働いて経験してみたい。経営がわかり、経験を豊富にするため。将来は、マレーシアで化学関係の経営をしたい」（女性）

《補注》

（1）国費留学生には、「国・社会への貢献」として、中国の洪水被災者への義援金活動に取り組んだ者もいる。「中国で大洪水があってたくさんの人が死んだというニュースを見て、中国人留学生会で義援金を集めた。僕は留学生会の会長だったので、一生懸命やった。２カ月以上、研究はストップして、企業や機関を回ったり、学生や先生に呼びかけた。僕を見て、馬鹿だとか、おかしいとか言う留学生もいた。僕も研究が遅れるので焦ったが、国のためというのが半分と、会長だから仕方がないというのが半分で、最後までやった。そして、かなりのお金が集まった。後で総領事が大学にお礼にきて、記念写真をとった。すると、殆ど活動に参加せず、僕のことを悪く言っていた留学生も皆やってきて、一緒に写真に写った。でも僕は、これでいいと思っている。個人の利益や名誉より、国の事はもっと大事だから」（日本政府国費留学生）

（2）すべての専門学校生が金銭を重視しているわけでは決してない。「お金より精神的なものを求めたい。お金はいくらもっていても限りがない。父は学者で、私はそういう教育を受けたから」。

（3）韓国人留学生にも次のような意見もある。「仕事と家庭、どっちを優先するかは難しい。どっちにも責任があるから。両立としか言えない。私は家族に苦労かけてきた。妻や子にはすまないと思う。仕事の単身赴任なら、家庭のためと言えるかも知れないが、留学は完全に自分自身の目的。妻と子に暗い生活を強制してしまう面も多分ある。これから、子供の教育に力を入れないと、あとあと自分が困る」。

（4）専門学校生にも、自立・自信を自己の変化として指摘する者もいる。「日本で、私達、つらいでしょう。でも、つらくても、これも人生の経験、めったにできない珍しい経験です。こうした経験も笑って受けとめていきたい。そしてそれを、今後の人生の中で生かしていけると思う。人間性・人間が変わるというのが、

私にとって一番大きなことなのです」。また、「日本での生活体験は忙しすぎ、働きすぎで役に立たない。貯めた資金も少なすぎるので将来の役には立たない」との意見もある。

（5）ある大卒専門職出身の就学生は「日本の商社に就職したい。カメラの会社に英語を勉強しなさいと言われている。私には、そういうコネがあるので大丈夫。でも、就学生から仕事ビザに変えられるか。そこがわからない」と語る。またある高卒労働者出身者は「今後、結婚して日本に定住する。相手は残留孤児の子供で、中国国籍だが日本の定住権をもっている。今、結婚のビザに変更手続中。将来は、金をためて自分の店をやりたい。2人で中国に帰って店をやるかもしれない。来日前、中国に店を作るつもりだったから、日本で同じことをやるかなと思っている」と語る。

（6）ある韓国人私費留学生は、「ドクターが終わるまで、あと5年は留学したい。でも韓国は軍隊が義務だから、今はドクターまでいるかどうかわからない」と語る。